十全同窓會會報

〒920-8640
金沢市宝町13の1
金沢大学医学部
十全同窓会
編集委員会
印刷／ヨシダ印刷㈱

年頭所感　平成維新の幕開け

十全同窓会会長　佐藤　保

新年明けましておめでとうございます。会員の皆様方は新年をどのような感慨でむかえられたでしょうか。私の場合はやはり、開学百五十周年があと一年後に迫ったという緊張感でありました。先に配布した趣意書に述べたごとく記念事業の内容が決まり、同窓会は計画推進のため創立百五十周年記念事業寄附口座を開設し、一昨年十月より募金活動を開始しました。二〇〇八年のリーマンショックに始まった世界的不況は、日本経済にも深刻な影響を及ぼし、円高不況のためいまだに景気の先行きは楽観を許しません。そのあおりで、募金活動は必ずしも円滑とはいえない状況にありますが、今後とも会員一人ひとりの熱意で盛り上げて下さいますようお願い申し上げます。

十全同窓会としてもう一つ、皆様にお知らせすることがあります。昨年末、全学のホームページに十全同窓会のホームページを立ち上げることが決まりました。同窓会会報は年に三回の発行ですので、記録を残す意味では重要ですが、今日の情報社会のメディアとして情報の迅速な伝達には不向きであります。ホームページができた暁には、会員連絡に活用していきたいと考えておりますので、双方向的な利用をお願い致します。

さて、自民党から民主党への政権交代があって一年が経過しました。その間、鳩山首相から菅首相への交代があり、先の参議院選挙では小沢政治資金問題が絡んで、与党の過半数割れが起り、国会は衆参ねじれ状態になりました。その結果として重要法案は可決されず、国会は官房長官や大臣の失言・問責決議など政党間の駆け引きに終始し、政策の遂行は進まない事態となっております。

国内では五倍の格差で憲法違反の宣告をうけた選挙人の定数問題、巷に医療崩壊といわれた医療制度の立て直し、このままでは破綻が確実な医療保険・介護保険の改革、そのための財源としての消費税の増税、年々悪化する若年者雇用問題、すでに破綻している貧困層セーフティネットの建て直し、いずれも喫緊の課題が目白押しの情況であります。

一方国外では、尖閣諸島における中国の領海主張、北方領土の領有権をめぐるロシアとの駆け引き、さらには北朝鮮の韓国砲撃事件など、東アジアの国際緊張は俄かに高まってきました。沖縄の米軍基地移転問題も、日米間の政府合意と地元沖縄住民との意識のズレは到底埋まりそうもなく、戦後六十年を経て、日米安全保障条約は見直されるべき時にきております。これら重要な外交問題の解決には、安定した政権基盤に立つ一貫した粘り強い外交政策が不可欠ですが、わが国の状況はそれに程遠いのが現状です。

これら内外の情況は、黒船が来たと騒いだ明治維新のそれに匹敵するものであり、あえて平成維新と表現しても誇張とはいえない逼迫した情況であります。昨年末、金沢工大で開かれた伊能忠敬の日本全土図を見て、強い感動を覚えました。彼は五十五歳で隠居してからこの仕事を始め、七十四歳で死ぬまでに日本全土を行脚し、自分の歩幅を元にしてこの地図を完成しました。その精度は、後にイギリス海軍の江戸湾測量を断念させたほど高いものでありました。忠敬の行動を支えたのは日本の国土への強い想いであったと思われます。そして今、私たちに求められるのは、生まれ育ったこの国への愛でありましょう。この年が皆様にとって幸多き年であることを祈っております。

目　次

年頭所感　平成維新の幕開け……1
創立百五十周年記念事業の進捗状況（続報）……2
秋の叙勲……2
就任挨拶……3
受賞……4
学会報告……5
新設寄附講座のご案内……6
論説……7
十全学術行脚　第二十回……8
病院紹介……10
教室だより……12
支部だより……14
クラス会……17
医学部百五十年史のための覚え書【30】……20
学生課外活動支援報告……21
十全昔話……24
学生コーナー……25
ホームカミングデイ……26
教授退職記念講演会・記念式のお報せ……26
編集後記……26

創立百五十周年記念事業の進捗状況（続報）

井関尚一

まず寄附金の状況ですが、十一月十五日現在で三〇、九八八、〇〇〇円となりました。前回の本会報の記事でご案内をしてからわずか一ヶ月余のうちに、四六八件、九〇〇万円近くのご寄附をいただきました。なかには非常に多額のご寄附を下さった会員もおられます。お一人ごとに礼状は出しておりませんが、この場をお借りして、心から御礼申し上げます。三、〇〇〇万円という金額は、すでに着手した事業（医学部百五十年史、記念モニュメント、キンストレーキのデジタルアーカイブ化）をほぼまかなえる計算です。今後集まる金額しだいで、二〇一二年に予定する記念式典やシンポジウムのほか、医学部記念館修復やプロムナード整備などのキャンパス美化事業を実施することが可能になります。今年は医学展来場者や保護者の会あてにも募金案内をいたしました。また現職の教員に対しても、従来からの給与天引き以外に随時ご寄附をいただくよう、ボーナス時に呼びかける予定です。先日のホームカミングデーにおいて、全学の創基百五十年記念事業への募金案内があり、紛らわしいとの声をお聞きしました。私は全学の記念事業の委員でもありますが、医学部同窓会員の皆様には医学部百五十周年記念事業にご寄附いただくことが、確実に医学部のためにお志を役立てていただく道であることを申し上げておきます。

次に記念事業の状況ですが、先日ご報告した金沢医学館初代卒業生の群像をモチーフとしたモニュメント制作を、すでに金沢美術工芸大学の彫刻専攻の石田洋介教授にお願いしました。同大学としては久世学長をはじめとして、全面的に協力してくださるそうです。このモニュメントについては、モデルとなる卒業生の子孫の方々から情報が寄せられるなど、会員の皆様に大きな関心をもっていただいているようで、準備委員会としては心強い思いがいたします。二〇一二年の五月までに確実に完成するとのことです。またキンストレーキのＤＶＤについては、国宝修理所による修理過程を記録したビデオの各場面に文字による説明（筋肉名など）を添付する作業を済ませ、とりあえず十一月六日の医学展においてスライドショーの形で展示しました。今後さらに音声による解説を中心として編集を進めていく予定です。医学部百五十周年記念誌（百五十年史）については頻繁に編集会議を開いて作業を進めております。

彦三種痘所跡地の石碑については、全学の創基百五十年事業の一環として、赤祖父会員のご研究により判明した現彦三郵便局敷地内に設置する方針が決まっており、現在、郵便局会社との間で用地提供について折衝中とのことです。金沢市が旧町名の表示に使っているような石碑になる予定であり、碑文もごく簡単なものになると思います。医学部百五十周年記念事業としては、これと同じような石碑を、金沢医学館跡地である現大手町の市医師会館の敷地に建てることを計画しており、近いうちに医師会および金沢市にご相談するつもりでおります。宝町キャンパスにおいては、臨床系の新総合研究棟の建築が進み、すでに鉄骨が組み上がっていますが、残念なことに第二期分の建設にかかる概算要求がストップしているために、全体の半分だけの着工となっております。研究棟にしてからがこの有様ですから、今後プロムナードなどのキャンパス美化事業で国の予算をあてにするのは難しいかもしれません。今回の記念事業で可能であるなら実現させたいという気がいたします。

二〇一二年の記念式典の予定についてはまだ決まっておりません。学術的な内容での記念シンポジウムは、十全医学会との共催とする予定になっております。全学の記念式典、医学部の記念式典、医学部十全同窓会総会、記念シンポジウムの四者をどう組み合わせるかについて、それぞれの関係者とご相談しながら今後検討いたします。会員の皆様にはもしご希望、ご提案がありましたら、準備委員会のメンバーでもある加藤理事長を通じてお寄せください。

以上、ご報告いたします。まことに厚かましいお願いでありますが、まだご寄附をいただいていない会員には募金の趣旨にご賛同くださり、よろしくご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。前回の会報に同封された振込用紙をご利用いただくか、百五十周年記念事業のＨＰ（http://www.kikin.kanazawa-u.ac.jp/kikin_med150/）からお申し込みいただければ幸いです。

秋の叙勲

瑞宝中綬章

久田　欣一（昭和二十八年卒業）

髙野　陽（昭和三十八年卒業）

竹島　俊雄（昭和三十八年卒業）

旭日小綬章

福田　孜（昭和三十八年卒業）

瑞宝小綬章

鳥居　方策（昭和二十九年卒業）

旭日双光章

中村　彰（昭和三十四年卒業）

本学医薬保健研究域保健学系医療科学領域量子医療技術学教授に就任

川島　博子　博士（平成二年卒業）

就任挨拶

金沢医科大学学長就任のご挨拶

勝田　省吾（昭和四十六年卒業）

この度、平成二十二年九月一日付で金沢医科大学学長を拝命いたしました。十全同窓会の皆様に、今日まで賜わりましたご指導・ご高配に対するお礼を兼ねて、ご挨拶を申し上げます。

私は、昭和四十六年金沢大学を卒業後、梶川欽一郎教授主宰の第一病理学教室に大学院生として入りました。梶川先生には学問の厳しさと楽しさを教えていただきました。北川正信助教授には人体病理学の手解きを受けました。病理学の広さと深さに魅了され、大学院修了後も病理学の道を歩むことにしました。一時期、金沢大学医療技術短期大学部に助教授として赴任し、色々な分野の方と仕事をする機会に恵まれました。昭和五十八年、中西功夫教授が第一病理の教授に就任され、私を助教授として迎えて下さいました。スピーディーでスマートな中西先生の下で、助教授として教室員一同と苦楽を共にした十一年が現在の私の大学人としての原点になっております。

また、この間、金沢大学医学部の多くの先生のご指導、ご高配を賜わりました。早くから、十全同窓会会報の編集委員に加えて頂き、年二～三回の会報編集に関わりました。当時、中村信一先生（現金沢大学長）の教室で掲載記事の切り貼りをし、手作業で会報を作っていました。編集作業を終え、せみの鳴く夏の夕暮れに和菓子とお茶をいただきながら色々と話し合ったことが楽しい思い出となっております。また、「金沢大学医学部百年史以後三十年の歩み」の編集委員に加えていただき、竹田亮祐医学部長、廣根孝衛十全同窓会理事長、山口成良編集委員長をはじめ編集委員の先生方と一緒に仕事が出来たことを今でも誇りに思っております。更に平成四年、馬渕宏教授が日本動脈硬化学会を金沢で開催された折、私の米国留学時の恩師であるワシントン大学のロス教授を特別講演に招待して頂いたことも忘れることができません。現在も医学部の多くの先生方や十全同窓会の皆様に懇意にしていただいており、心より感謝しております。

平成六年七月に金沢医科大学に移ってから歴代の理事長、村上暎二先生、小田島粛夫先生（元学長）、山下公一先生および歴代の学長、竹越襄先生、山本達先生、山田裕一先生の下で多くの仕事をさせて頂きました。そして、それらの仕事を通して多くの教職員の方々とつながりを持てた事が私の現在の財産となっております。

金沢医科大学は二年後の平成二十四年に開学四十周年を迎えます。諸先輩方の弛まぬ努力によって築かれた我が金沢医科大学をさらに発展させ、後に続く人達に渡すことが現在いる私達の責務と考えております。ここ北陸の地でキラリと光る医科大学を目指して教職員・学生ともに努力していきたいと考えております。十全同窓会の皆様には今後とも温かいご支援を心からお願い申し上げます。

徳山研一博士

（昭和五十四年卒業）埼玉医科大学教授に就任

平成二十二年二月一日付で埼玉医科大学医学部教授（大学病院小児科）を拝命いたしました。私は昭和五十四年三月に金沢大学医学部を卒業後、直ちに郷里の群馬に戻り、群馬大学医学部小児科に入局しました。その後、四年前に高崎健康福祉大学薬学部教授として赴任するまで、約二十五年間群馬大学小児科を中心に勤務いたしました。この間、英国国立心肺研究所に留学し、気道の神経原性炎症につき研究する機会を頂きました。

専門は小児のアレルギー疾患で、主たる研究分野は小児気管支喘息の病態生理、特に気道炎症の役割の解明です。小児気管支喘息は治療の進歩にも関わらず、治癒率は改善しておらず、今後治癒に向けた治療計画や発症予防に寄与できればと考えております。

埼玉医科大学病院小児科は明日を担う地域小児の一次医療から三次医療までを担っており、地域医療の充実に向け微力を尽くしたいと考えております。併せて、本学には全国的にも数少ないアレルギーセンターが開設されており、各診療科の垣根を超えたグローバルなアレルギー診療体制の構築とともに、アレルギー研究の発展にも貢献していきたいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

津川浩一郎博士

（昭和六十二年卒業）聖マリアンナ医科大学教授に就任

この度、平成二十二年九月一日付で聖マリアンナ医科大学外科学　乳腺・内分泌外科教授を拝命いたしました。私は、昭和六十二年に金沢大学医学部医学科を卒業し、宮崎逸夫教授が主宰する金沢大学医学部第二外科学教室に入局、平成五年に金沢大学大学院を修了しました。平成九年、三輪晃一教授の就任とともに、現在の専門である乳腺・内分泌外科を専門と定め、助手として研鑽させていただきました。折しも癌手術が拡大手術から合理的縮小化に向かう時代で、特にセンチネルリンパ節生検の研究は臨床研究ながら様々な展開をみせ、今日に繋がっています。

平成十七年、聖路加国際病院ブレストセンター設立にあたって、中村清吾部長（現　昭和大学教授）からお誘いを受け、スタッフとして赴任いたしました。多くの症例に恵まれ、施設自身も日本で一二を争う大きな施設に成長いたしました。そして、今回、奇しくも同窓であられる福田護前教授（昭和四十七年卒業）が築かれた教室を主宰する教授として赴任する機会を得ました。今後は、次世代の医師、研究者を育て、乳癌診療・研究の発展に一生を捧げようと思います。本学ご卒業の若い方で、乳癌、外科腫瘍学に興味のある方は是非、ご連絡をいただきたいと存じます（E-mail: koitsuga@marianna-u.ac.jp）。末筆になりましたが、十全同窓会会員の皆様のご健勝を祈念いたしますとともに、皆様のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

受賞

金沢市文化賞受賞

東田　陽博教授

平成二十二年十一月三日文化の日に、金沢市民ホールで、山出金沢市長より、約二五〇名の参加者の前で、金沢市文化賞を受賞しました。同時に受賞したのは、教育学部を卒業されている重要無形文化財「能楽」保持者の薮俊彦さんと重要無形文化財「友禅」保持者で人間国宝の二塚長生さんでした。

このならびだと、さしずめ、重要無形文化財「医学」保持者として認められたのか、とうれしくなりました。当日、この名誉と喜びを、家族、教室や子どものこころの発達研究センターの皆と分かち合いました。

永年にわたる脳の記憶過程に関する研究に従事し、中でも、リーダーとして提案した研究「革新脳科学の創成」が、世界最高水準の研究拠点形成を目的とする文科省の「二十一世紀ＣＯＥプログラム」に採択されるなど、神経化学者として、顕著な業績を挙げて来た事が認められました。

特に、女性のためだけのホルモンと考えられていたオキシトシンが、最近では視床下部で放出され、それが、信頼や愛情の気持ちを生み出す事がわかりました。このオキシトシンの神経分泌細胞からの放出過程で、「脱分極―分泌連関」と呼ばれる生理学上の大原則によらない分泌が存在し、それが、ＣＤ38分子により作られるサイクリックＡＤＰリボースがカルシウムシグナルを増幅して生じるという発見をしました。このマウスの実験をもとに、自閉症の診断と治療に新しい道を切り開くなど、我が国の医学の発展に貢献していると評価されました。

大学病院に子どものこころの診療科、子どものこころの発達研究センター、連合大学院小児発達学研究科の発足に寄与し、姉妹都市韓国全州市にある、全北大学医学部との交流を促進した功績も顕著であるとされました。

臨床化学会奨励賞　受賞

原　章規博士（平成十二年卒業）

この度、附属病院救急部特任助教、原章規博士が平成二十二年度臨床化学会奨励賞を受賞しました。本学会は日常の臨床の場において、分析技術を土台に据えた臨床化学検査を医療に提供することと共に、病因・病態の解明や治療・予防に寄与することを目指しています。その主旨にのっとり臨床化学の発展を目的とした若手研究奨励に該当する奨励賞を含む学会賞は平成十一年度に設立され、今回で十二回目でした。受賞した研究内容は「エリスロポエチン―エリスロポエチン受容体相互作用に関与する抗体の検出とその臨床的意義の検討」です。テーマの発端となったのは、実際に私共が経験した全身性エリテマトーデス（ＳＬＥ）患者に合併した赤芽球癆です。本例の血清中に抗エリスロポエチン（ＥＰＯ）抗体を同定して以来、腎臓病／膠原病例を中心にＥＰＯ-ＥＰＯ受容体系における自己抗体の存在に注目し、その同定と機能解析を行ってきました。これに端を発し、世界に先駆けてＥＰＯ受容体阻害因子を同定し、臨床的な意義を検討しています。本研究は、次の二つの点で臨床応用が期待されます。一つ目は、貧血の病因・病態診断です。ＥＰＯ低反応性の機序解明とその克服は患者のＱＯＬや生命予後の観点から重要な課題です。本研究で確立したスクリーニング系を臨床検査診断キットとして利用できる可能性が挙げられます。二つ目は、腎性貧血の治療薬として臨床応用されている赤血球造血刺激因子製剤の治療反応性を予測するバイオマーカーとしての可能性です。今後も臨床応用に向けさらなる研究の展開が期待されます。

（和田　隆志　記）

日本病理学会学術研究賞受賞

佐藤保則博士（平成十二年院卒業）

この度、日本病理学会学術研究賞を受賞し、平成二十二年十一月二十五、二十六日に北九州市で開催された第五十六回日本病理学会秋季特別総会において、Ａ演説（受賞講演）の機会を頂きました。受賞テーマは、「カロリ病の肝内胆管拡張と肝線維化機序の解明とその制御：動物モデルＰＣＫラットを用いた検討」です。Ａ演説はわが国で行われた病理学分野の研究で優れており、かつ蓄積された研究であることが選考趣旨となっています。このような栄誉ある賞を受賞することができ大変光栄に存じます。ご指導を頂きました中沼安二教授をはじめ教室の先生方、関係の皆様方に心より御礼を申し上げます。私は平成十三年に病理学第二（現形態機能病理学）講座に入局し、肝胆道系疾患の病理学的研究と病理診断の研鑽を積んで参りました。入局してすぐに中沼安二教授より与えられた研究テーマが「カロリ病に関する研究」です。カロリ病は肝内胆管の拡張を示す非常にまれな疾患ですが、私が入局した頃、当講座でカロリ病の動物モデルであるＰＣＫ（polycystic kidney）ラットが見出され、幸運にもこの優れた動物モデルを用いて現在まで約十年間、研究を行うことができました。まだまだ解明すべきことが多く残されており、今後もカロリ病の病態解明と治療を目指して研究を展開する所存です。今後とも会員の皆様方にはご指導ご鞭撻を頂きますよう宜しくお願い申し上げます。

AHA Resuscitation Science Symposium において Young Investigator Award を受賞

栗田昭英博士（平成十四年卒業）

二〇一〇年十一月十三～十四日アメリカ合衆国シカゴにてAmerican Heart Association Resuscitation Science Symposiumが開催され、蘇生科学分野における臨床および基礎研究約三〇〇題が発表された。その中で本学附属病院麻酔科蘇生科の栗田昭英助教が発表した"Effects of atorvastatin on mortality and inflammatory responses to severe hemorrhagic shock in rats"がYoung Investigator Awardを受賞した。

今回受賞した研究は、以前より麻酔科蘇生科と行っている共同研究の一つであり、抗炎症作用を有すると考えられている高脂血症治療薬に焦点を当て、ラット出血性ショックモデルの多臓器不全に対して、atorvastatin内服が有用であることを明らかにしたものである。本研究は臨床への応用の可能性が評価され今回の受賞となった。これまでも蘇生科学に関する基礎研究で、二〇〇七年には谷口巧

が、二〇〇九年には大辻真理が同賞を受賞しており、今回で三度目の受賞である。今後も、更なる発展を目指し、切磋琢磨していく所存である。（谷口　巧　記）

学会報告

第十四回 日本肝臓学会大会

平成二十二年十月十三日（水）と十四日（木）の二日間、パシフィコ横浜で第十四回日本肝臓学会大会を主催させて頂きました。消化器病学会、消化器外科学会、消化器内視鏡学会などの連携学会（JDDW 二〇一〇）の会期中（十月十三日～十六日）での開催であり、二万人の消化器関連会員の参加があり、朝から多くの会員が会場に集まり、大変盛況でした。肝臓学会大会の主催は、病理系会員としては、今回が初めてですが、多くの臨床系の先生方の協力を得、大役を終えることが出来ました。

今回の肝臓学会大会では、五六二題の演題の申し込みがあり、最近の肝臓学会大会では最も多い演題数であり、講演会場、主題会場、示説会場、その他の会場で、多くの肝臓学会会員の参加があり、準備周到な発表に対して熱心な議論が展開されました。肝臓学会大会は臨床系学会ですが、会長の特殊性を考慮し、今回の大会では肝臓病理学を少しクローズアップさせて頂きました。多くの肝臓病理の先生方、病理学会会員の参加がありました。会長講演として、私のライフワークであります『肝内胆管の解剖と病理』を講演させて頂き、原発性胆汁性肝硬変（PBC）と胆管癌に関する教室の成績を発表させて頂きました。また、米国メーヨークリニック消化器・肝臓病の主任であるGores教授、韓国ヨンセイ大学病理学のパク教授には、胆管癌と肝細胞癌の講演をして頂き、大変好評でした。

また特別企画である肝臓病理一日コースは、大変な盛況であり、四〇〇人の会場が満席となりました。発表者、司会者は、全て病理医にお願いし、二名の外国の肝臓病理医にも参加して頂き、インパクトのある企画となりました。また自己免疫性肝胆道系疾患に関するシンポジュウムでは、久しぶりに六〇〇席の会場がほぼ満席となり、原発性胆汁性肝硬変や自己免疫性肝炎の演題発表があり、最近の研究成果や臨床経験が発表されました。

二年前に本大会の主催が決まり、原田准教授が中心となり、教室員と伴に、本大会成功に向けて準備して参りました。他の消化器関連学会との連携学会のための打ち合わせや交渉などが多く、長い道のりでしたが、かつてない多くの参加者があり、活発な議論がなされ、本大会は成功裏に終了しました。これも十全同窓会会員皆様方の日頃のご支援の賜物と感謝申し上げます。

（中沼　安二　記）

Korea-Japan Joint Symposium on the Recent Advances in Medical Science

金沢大学医学系研究科医学科・医学類と韓国全北大学校医学専門大学院・医学部との友好交流の一環として、平成二十二年十月二十八日に、第三回目となる、金沢―全北大合同日韓シンポジウムが、国立全北大学校医学部のライフサイエンス棟の講堂で開かれた。このシンポジウムは、友好協定締結時の第一回を全州市で、第二回を金沢市で、そして、今回と、Korea-Japan Joint Symposium on the Recent Advances in Medical Scienceと題して開かれて来た。金沢大学から、山本博研究域長、井関尚一学類長、三邉義雄副病院長、浅野雅秀学際科学研究センター長、東田陽博子どものこころの発達研究センター長、生化学が専門の村松正道教授と、病院検査部の林研至助教の七名が参加し、糖尿病、胎生発生、精子形成、自閉症のメカニズムと脳機能計測による診断、免疫記憶とQT延長心疾患などについて、それぞれの最新のデーターを紹介した。一方、韓国側からは、内科肝臓学のDae Ghon Kim医学部長や生化学のUh-Hyun Kim教授をはじめ、七名の参加があり、抗皮膚炎症剤、急性腎炎の治療、肝硬変・肝繊維症メカニズム、脂肪細胞での抗糖尿病作用、PET用新化合物や、ERストレスと病気などのテーマで講演があった。両校の特徴を出しながら、幅広い医学領域の課題を討議し合った。

二十九日朝には、徐巨錫全北大学校総長を訪問し、シンポジウムの成功を報告するとともに、更なる両大学間の協力関係の発展について語り合った。中央大学

法学部に学んだ事のある総長から、日本の最古の医学部についての情報を逆に教わる事などもした。

到着日およびシンポジウム当日の夕食会は伝統的韓国料理で歓待された。全州市は韓国食文化の中心であり、特に、ビビンバ発祥の地であるので、昼食はカラフルなビビインバップに舌つづみを打った。野菜が多く、珍しい山野草、また全州でのみ飲める特別な健康酒やマッコリなど、とても、健康的な食事に全員が堪能した。

金沢市が全州市と友好姉妹都市である事に気がついて、始めた医学部同志の交流なので、前回に引き続き今回も、山出金沢市長から、宗全州市長（Uh-Hyun Kim教授と高校の同窓生）宛の親書をたずさえ、全州市役所を表敬訪問した。あいにく全国市長会に出席で不在であったため、安副市長と両市の様々な、特に、医療や介護の問題点について話あった。

飛行機の関係で、土曜日にソウル市内観光をし、目覚ましく発展をとげた、元気いっぱいの韓国に元気をもらって、小松への帰路についた。（東田　陽博　記）

第三回 金沢大学未来開拓研究公開シンポジウム東京にて開催

Features for the Futureをキャッチコピーとする、金沢大学未来開拓研究公開シンポジウムが、平成二十二年十一月二十七日、東京都港区KOKUYO HALLを会場に開催された。本シンポジウムは、学域・研究域創設を記念し、各研究域のアクティビティーを社会に示すため、金沢大学が平成二十年度来主催してきたもので、東京での開催は前回につづき二度目。今回のテーマは「国際」。「金沢大学の国際共同研究―中国、ベトナムそしてカンボジアへ」との主タイトルの下に、中村信一学長による特別講演「ボツリヌス菌を訪ねて～細菌でたどるマルコポーロの道～」、人文社会研究域・中村慎一教授の講演「中国における都市と国家の起源～稲が育んだ古代文明～」、医薬保健研究域・市村宏教授の講演「東南アジアにおけるウイルス感染症～HIV研究・教育のベトナムからの発信～」、環日本海環境研究センター・塚脇真二教授の講演「アンコール遺跡とトンレサップ湖～世界遺産と地域住民との調和的発展をめざして～」が行われた。シンポジウムは、二二〇名の参加者を得、盛会裡に開催された。今回初の試みは、各分野におけるわが国の第一人者を指定討論者として招き、講演者とのディスカッションを行ったこと。これにより、世界を舞台とする金沢大学の研究活動とその成果および学術的、社会的な意義が客観的にわかりやすく位置づけられた。シンポジウムにつづき開催された「金沢大学交流会」にも多数の参加があり、活発な懇談と交流が繰りひろげられた。十全同窓会東京支部・山梨県支部からもご参加いただいた。ご参加いただきました支部長・会員の先生方と関係者ならびにお声をかけていただきました各位に改めて御礼申し上げる次第です。

（山本　博　記）

シンポジウム冒頭であいさつする中村信一学長

新設寄附講座のご案内

石川県寄附、金沢大学大学院「地域医療学講座」を紹介させて頂きます。

二〇一〇年度政府予算で、地域医療再生が算定され、全国各都道府県に予算措置が講ぜられました。石川県では、この予算に基づいて、地域医療を担う人材の育成のため、金沢大学、金沢医科大学に「地域医療学講座」を設置しました。これは、地域医療を支援していくために金沢大学附属病院と石川県が協力して二〇〇八年七月に設立された石川県地域医療支援センターの二〇一〇年度事業であります（一）金沢大学における新たな五つの寄附講座の設置、（二）脳卒中、認知症にかかる診療ネットワークの構築、（三）シミュレーションセンターの整備、（四）金沢大学医薬保健学域医学類特別枠入学者のキャリア形成、のうちの一事業であります。

これらのうち、寄附講座の設置につきましては、予め石川県の調査によります地域の要望に基づいて計画されました「内科」「外科」「救急」に関わる地域医療発展のため、地域医療がん内科学・糖尿病学講座、地域医療循環・栄養・代謝学講座、地域医療心肺・総合外科学講座、地域医療がん外科学講座そして地域医療救急・整形外科学講座（いずれも設置期間：二〇一〇年八月一日～二〇一四年三月三十一日）の五講座が二〇一〇年八月から開講されるにいたりました。各講座においては、能登北部、南加賀を中心とした地域医療施設での診療の充実を図る一方、一部の基幹病院では常勤医師が増員され、総合的診療の充実を図りつつあります。

具体的には、地域医療がん内科学・糖尿病学講座では特任准教授二名、地域医療循環・栄養・代謝学講座、地域医療心肺・総合外科学講座では各々特任教授一名、特任助教一名、地域医療がん外科学講座では特任准教授一名、特任助教一名そして地域医療救急・整形外科学講座では特任教員二名を配して、中能登、奥能登、南加賀地域の診療支援の充実に努めています。

また、来年度からは更に診療内容の充実を図る方策を考慮する講座もあり、本寄附講座支援計画が順調に進んでいることが窺えます。本予算措置は当面、二〇一四年三月末で終了予定ですが、地域と連携した講座活動を今後も充実していくことが重要な課題といえます。

（山岸　正和　記）

論説

卒後研修の現状と将来　第三報

―二十三年度金沢大学臨床研修プログラムマッチングの結果から―

金沢大学卒後臨床研修センター長　吉崎　智一

平成二十三年度の卒後臨床研修プログラムのマッチング結果が発表になりました。毎年、大学病院、一般病院、さらには地方自治体が一喜一憂します。昨年大きく方向転換した臨床研修制度ですが、昨年と今年の結果も踏まえて研修医の動向について考察したいと思います。

新臨床研修制度が発足して六年が経過しました。地方大学を離れ、都市部の大学病院および一般病院に流れだした初期研修医を地方大学病院に戻すための改定が昨年施行されました。ひとつは都市部の都道府県定員を減らし、地方の定員を増やすこと、もうひとつは、特に都市部の小規模研修病院数を減らし、地方大学病院などの大規模病院での臨床研修を奨励する目的で、臨床研修指定病院の年間入院患者数の下限を三、〇〇〇人と設定しました。地方においては大学病院を中心とした研修病院群の構成により、地域で医師を確保することを目指しました。しかし、平成二十三年度マッチング結果を見る限り、地方大学を含めた大学離れの傾向は続き、大学病院を研修先に選択した研修医は過去最低の四十七％となりました。昨年もご紹介しましたが、もう一度、改正点を以下にお示しします。基本的なコンセプトは、

一、研修医の将来へのキャリアへの円滑な接続が図られるよう、研修プログラムを弾力化

二、卒前卒後の一貫した医師養成を目指し、研修の質の向上や学部教育の充実を図る

三、医師の地域偏在対応、大学等の医師派遣機能強化、研修の質向上の観点から募集定員を見直すこと

です。

卒後臨床研修制度の見直しは、臨床能力向上への貢献度が低いために見直しとなったのではなく、地域医師不足解消のために巻き起こった議論です。二十二年九月に開催された卒後研修検討会では「卒後臨床研修期間短縮の可能性」をめぐって厚労省および文科省の担当者との意見交換が行われました。要約しますと「研修制度の変化に対し、研修到達目標が乖離していることに対する見直しは、卒前教育における臨床研修、さらには、臨床能力が担保されたうえでないと行わない（厚労省）」に対して「卒前教育のプログラムについては各大学の独自性を尊重する（文科省）」ということでした。厚労省の医局つぶしが失敗に終わり、現在一時的かもしれませんが、厚生労働省と文部科学省が一貫して医師養成を考えるようになったことは歓迎すべきと思います。医学部の六年目は最初の三ヶ月にクリニカルクラークシップ、その後は試験勉強と称した自習および卒業試験、初期研修先探しに当てられます。そこで、初期研修で行う内容を医学部生時代に行うことの是非も検討されています。医学部時代のBSL、クリニカルクラークシップなどの臨床実習は重複傾向にあります。医療行為を制限されている実習よりは、Advanced OSCEなどで一定の条件をクリアーすれば、学生であっても一定の医療行為が施行可能となる、いわゆる、車の運転で言えば仮免許を与え、そこで行われる臨床実習を、初期臨床研修の一環に組み込む、というコンセプトです。この件は繰り返し課題に上ってきます。しかし、医師国家試験制度自身の改定を伴うために、実現へのハードルはかなり高いようです。

研修先として大学病院選択者が今年度も減少する中、今回も昨年度同様に多くの医師の卵が金沢大学のプログラムを選択してくれました。自学出身者は昨年が七十五％であったのに対し今年は六十六％に減少しました。一般に、大幅に増加した次は反動で減少するものですので、なんとなく予想していました。しかし、金沢大学のプログラムが他大学の学生からも支持されてきたことにより、トータルのマッチ者数が昨年と同様の水準になったのではないかと、少し贔屓目にとらえております。

もちろん、制度の変革に伴い、金沢大学独自の魅力的なプログラムを作成したことは大きな理由だと思います。いわゆるたすきがけを中心としたスーパーローテートと将来の専攻科と直結する専門コースに大きく二分されました。専門コースでも二年間を通して大学で研修する人は少なく、common diseaseを一般病院で、難易度の高い疾患を大学病院で、という研修スタイルは人気が有ります。これらの金沢大学研修プログラムが実質的に多様性に富んだ、魅力的なものに仕上がっている根底には、金沢大学の各医局と関連病院群とのしっかりとした協力関係があります。この厚み、深みが、先輩の口を通して後輩に伝わっていくことが重要であると考えています。最も効果的なPRは口コミです。研修センターのスタッフは元より、各病院、各診療科が、自科のエゴに走りすぎることなく研修医を育てる姿勢、自分の科に入らなくても、大学さらには北陸地方の病院に残れば、全体として医師数が増加し、各病院、各科の医師数が増加するという広い目で研修医教育に参加いただければ、金沢大学、すなわち、北陸地方は非常に初期研修に適した所だという認識が定着してくれるものと思います。数が足りるだけでは十分なプログラムではありません。次は、大幅に増加した研修医に質の高い研修を提供することを目指して改善に尽力しています。プログラム、研修内容の充実はもちろん大切ですが、ロールモデルとしての指導医の役割、自分たちの地域で医師を育てるという患者側の意識が必要不可欠です。今後とも皆様のご協力とご理解をよろしくお願いいたします。

十全学術行脚 第二十回
―埼玉医科大学―

埼玉医科大学は、すぐれた実地臨床医家の育成を主な建学の理念として、昭和四十七年に開学された私立医科大学です。

大学本部のある埼玉県入間郡毛呂山（もろやま）町は武蔵の国、埼玉県の西部で、関東平野と秩父山系の境に位置します。

埼玉医科大学には現在三つの大きな関連病院が埼玉県内にあります。毛呂山町に大学病院（八〇一床）、川越市に総合医療センター（九一三床）、日高市に国際医療センター（六〇〇床）となっています。それぞれの病院で金沢大学出身の先生方が活躍されています。

総合医療センター（川越市）

今回、十全同窓会から、埼玉医科大学にいる金沢大学出身の先生方を紹介してほしいと依頼がありました。以前から面識のある同窓の先生方もおられますが、三つの病院はそれぞれ離れており、科が違うとほとんど交流もありませんので、大学の人事部で金沢大学出身の先生の最新の在職状況を確認しました。

大学病院（毛呂山町）

平成二十二年十一月現在、埼玉医大には教授四名、客員教授一名、准教授三名、講師三名、非常勤講師一名、助教五名の計十七名の金沢大学出身の先生方が在籍しておられました。

このうち教授、准教授、講師の先生方に、簡単な近況・専門などの自己紹介と、顔写真を送っていただく依頼を致しました。ご協力くださった先生方を卒業年順にご紹介させていただきます。

菊池功次客員教授
総合医療センター
呼吸器外科
（昭和五十一年卒業）

三年前に埼玉医科大学総合医療センター外科学教授を退職し、客員教授になりました。現在は外来、学生の教育を中心にのんびりやっています。

松田博史教授
国際医療センター
核医学科
（昭和五十四年卒業）

専門は脳核医学です。現在、東大の岩坪先生が主任研究者であるアルツハイマー病の世界的な多施設共同画像研究であるJapanese Alzheimer's Disease Neuroimaging Intiative (J-ADNI)において、MRIコアのPI(principal investigator)をしており、画像解析に専念しています。

徳山研一教授
大学病院小児科
（昭和五十四年卒業）

平成二十二年二月に就任しました。小児科学、特に小児アレルギー病学を専門にしています。主たる研究分野は、小児気管支喘息や食物アレルギーの病態解明です。

高橋啓介教授
大学病院整形外科・
脊椎外科
（昭和五十六年卒業）

整形外科の中でも脊椎外科を専門にやっています。石川県立中央病院から埼玉医大に来て十二年が過ぎましたが、いまだ金沢弁でしゃべっています。埼玉県内には、埼玉医大以外にも多くの金沢大学出身の先生方がおられ、埼玉支部長の中川正明先生のもと、二年に一回の頻度で十全同窓会埼玉支部会が開催されています。

中山光男教授
総合医療センター
呼吸器外科
（昭和五十七年卒業）

学生時代はサッカー部に所属。卒業後慶應義塾大学医学部外科学教室に入局。慶應義塾大学病院での研修、立川共済病院勤務、スタンフォード大学留学を経て一九九七年より埼玉医科大学総合医療センター呼吸器外科に勤務。二〇〇八年八月より現職。呼吸器外科全般を担当しているが、特に、気管・気管支疾患の外科治療を専門としている。

小田垣雄二准教授
大学病院精神科
（昭和五十七年卒業）

卒業以来、北海道大学、次いで二〇〇〇年からは埼玉医科大学で臨床、研究、教育に携わっています。多忙な臨床のかたわら、脳内の細胞内情報伝達系に関する薬理学的研究を続けています。今後できるだけ今のペースで実験を継続できるよう、最近は体力維持のために週に一、二回のスポーツジム通いを続けていますが、これが結構ストレス解消にも役立っているようです。

久慈一英准教授
国際医療センター
核医学科
（平成二年卒業）

専門は、核医学全般です。SPECT、PET、核医学治療を行っています。研究では、F-18-FDGを中心にアミノ酸代謝のC-11-メチオニンや低酸素プローブのF-18-FMISOなどPET/CT画像による核医学診断の研究を主に行っています。また、SPECT/CT融合画像について臨床的有用性を調べています。

近況：金沢大学病院から埼玉に移って、七年になります。教授の松田博史先生と一緒に二〇〇七年四月に開院した国際医療センター核医学科の立ち上げに参加させていただきました。当院は開設時の四〇〇床から段階的に現在の六〇〇床になり、四月には七〇〇床に増床の予定です。当院は、埼玉西部地区の循環器、脳卒中、がんの包括的治療に特化した専門大学病院ですが、特にがんセンターとしての役割が大きいです。当院の発展に伴って、現在では関東でも有数の核医学施設になったと思います。核医学科が独立しているところは金沢大学核医学の伝統を受け継いでいます。当科では松田先生のもとで、自由な雰囲気で臨床、研究が行われています。関東で核医学を研究あるいは学びたい同窓生の先生は、是非来ていただきたいと思います。

佐藤貴弘講師
国際医療センター
消化器外科
（平成三年卒業）

卒業後、金沢大学第二外科（現、がん局所制御学）に入局後、各専門医、学位取得後、平成十四年より癌研病院消化器外科（現、癌研有明病院）を経て、現在に至ります。専門は消化管癌が主ですが、現在は下部消化管の臨床が主です。毎年、医学賞、グラント、英文論文は必ず一つずつは出せるように自分に課しております。臨床医であり、かつ科学者であり続けたいと望んでいます。

長田久人准教授
総合医療センター
放射線科
（平成四年卒業）

小生は元々、埼玉県上尾市出身ということもあり、一九九二年金沢大学卒業後、千葉大学放射線科を経た後、十八年間、埼玉医科大学総合医療センター放射線科に勤務しております。日常業務は画像診断と血管造影・IVRです。当院は急性期病院ということもあり、症例が豊富な急性腹症のCTと緊急止血術などのIVRを専門とし、臨床研究を行っています。

今後も埼玉に住み続ける予定です。よろしくお願いいたします。

辻田美紀講師
国際医療センター麻酔科
（平成十一年卒業）

昨年四月より埼玉医科大学国際医療センターの麻酔科に勤務しています。専門は小児心臓麻酔で、先天性心疾患の患者さんの手術や検査の麻酔をしています。新生児から成人まで、疾患も様々ですが、毎日楽しく仕事しています。

以上の先生方以外に、大学病院では核医学科の瀬戸陽講師（平成三年卒業）、また非常勤講師として瀬戸幹人先生（昭和五十六年卒業）が開業の合間に整形外科や東洋医学の筋血流測定の研究指導をしておられます。総合医療センターでは青木耕平先生（呼吸器外科：平成十七年卒業）、山崎　俊先生（形成外科：平成十七年卒業）、中村かおり先生（皮膚科）が助教として、国際医療センターでは鈴木智成先生（脳脊髄腫瘍外科：平成六年卒業）、舟越和人先生（放射線腫瘍科：平成十七年卒業）が助教として、それぞれの分野で活躍されています。

（高橋啓介　記）

国際医療センター（日高市）

お知らせ

各支部における同窓生の学術的・医療的活動状況について寄稿をお待ちしております。

〒920-8640 金沢市宝町十三-一
金沢大学医学部十全同窓会 会報係
☎076-265-2132

病院紹介

公立羽咋病院

病院概況

羽咋病院の沿革としては、一九三四年から始まり、幾度かの変遷を経て、一九六九年に公立羽咋病院と改称し現在に至っています。羽咋市・志賀町・宝達志水町からなる広域圏事務組合立の病院で、地方公営事業法一部適用で運営されています。羽咋病院の診療圏は、この羽咋市・志賀町・宝達志水町の総人口約六万人、老齢化率約二十八％の地域です。常勤医師は十七名で、このほかに金沢大学・金沢医科大学から非常勤医師の派遣をうけています。安全な医療提供を目的とする電子化を進めており、電子カルテシステムが稼働し、二〇〇八年七月からDPC対象病院になりました。医療機器としては二〇〇六年にフィリップス社四十列CT、二〇〇九年にフィリップス社1・5TMRIを導入しました。また、二〇〇四年に日本医療機能評価機構の認定病院となり、昨年、認定の更新を済ませています。地域の病院として、周囲の医療機関との連携、行政との連携、事業所との連携を行うために、平成十五年から医療サービス推進室を設置し、専従の看護師二名、MSW二名、事務員一名を配置しました。推進室職員は、多方面の職務を行っていますが、最も重要な業務が地域連携です。病院と地域の接点として日々活動を行っており、地域の皆様から顔の見える病院職員と高く評価を頂いています。診療所からの患者紹介・検査依頼は全てこの部署で完結し、病院医師への連絡など院内の調整は推進室職員が行っています。各種画像診断依頼も、最初の電話で速やかに希望の日時に予約が完了します。地域の医療機関と病院医師の連絡会のほか、行政機関職員との連絡会、事業所職員との連絡会も定期的に開催し、医療知識や問題点の共有をはかっています。

患者満足度向上への取り組み

平成十四年から全退院患者を対象にした満足度調査と年二回の外来患者を対象にしたアンケート調査を継続しています。羽咋病院を継続利用して頂くための要因を明らかにするために、アンケートのポートフォリオ分析を行い、入院では療養環境の整備・外来では職員の顔の見える施設整備が重要との結果を得て、時間をかけながら病院改修を行いました。

職員満足度向上への取り組み

羽咋病院の業務目標の基本は、「やるべき医療、やれる医療、やりたい医療」をすべて実践することです。この実践には働きがいのある職場環境が必要と考え、職員満足度の向上に努めています。研究・研修への参加奨励、チーム医療の推進、医療事務作業員・看護補助者の増員、時差出勤推進、職種間協力の推進、勤務評価制度の導入等々を行っています。また、健康管理制度の改善として、院内CT利用を含めた各種がん検診の実施、麻しん他ウイルス抗体価測定、結核のクオンティフェロン測定、メンタルヘルス対策システム構築、年休取得推進活動等々も行っています。

経営状況と今後の課題

当院は、過去とほぼ同程度の繰り入れ金額を保ったまま、連続十五年間の健全経営を維持しています。平成二十年度には病院経営改革プランを策定しました。健全経営を維持するために年度ごとに項目別目標値を定め外部委員を含めた評価委員会で達成度の評価をしています。経営形態については全適化の検討が進められています。羽咋病院の最重要課題は医師・看護師の確保問題です。医師確保対策としては勤務医の処遇改善と臨床研修制度への参加を行っています。また、地域の病院が、その機能を維持するためには大学病院の医師派遣機能の回復・向上が不可欠であり、この立場からの大学病院の研修制度への協力を積極的に行っています。看護師確保も年々厳しくなってきています。新人教育制度の充実・奨学金制度の創設、処遇の改善などに取り組み、将来の七対一看護の導入を目指していますが、地方の病院ではまだまだ先と感じています。

また、病院施設の老朽化対策も課題であり、来年度に耐震化として改築を行う予定で、病棟の再編成問題を含めて検討中です。

（院長　鵜浦　雅志　記）

病院紹介

高岡市民病院

初めに

二〇〇九年は高岡開町四〇〇年という節目の年で、その年の九月十三日には前田利長公の高岡入城にちなんだ入城大行列が行われ、二十二万人という多くの観衆で高岡の街が賑わいました。その中に高岡の偉人達の行列があり、江戸時代活躍した高岡の町医者役に当院から私を含め四人の医師が参加し、こんなことを知りました。十一代加賀藩主・前田治脩公の嫡子教千代君が眼病に侵され、藩のお抱え医師や京都の名医を招き、診療に立ち会ったのですが治せず、高岡の松田三知と金子恕謙という町医者が召し出され、八日間の投薬治療で治したということでした。広く高岡の町医者のレベルの高さを世間に知らしめしたとのことでした。私達も大いに頑張らねばという思いを抱かせてくれました。

それでは本論に入ります。

病院の歴史

高岡市の中央部に開設された病院で現病院となるまでに、二度の移転・新築を経ています。前身である「健康保険高岡市民病院」は、昭和二十六年十月に開設し、内科、外科の二診療科、一般病床五十床からスタートし、順次、産婦人科、皮膚泌尿器科、耳鼻咽喉科、小児科などを増設してきました。昭和三十二年七月には完全看護・完全給食の実施、昭和三十四年四月に総合病院の承認を受け、昭和三十九年三月に「健康保険高岡市民病院」を現在の「高岡市民病院」と名称変更し現在に到っています。

一回目の移転・新築された病院は、現在の高岡市民病院の外来駐車場の場所にあり、昭和四十一年十一月から十診療科体制で診療を開始し、診療体制の充実を図るとともに病棟等の増築や高度医療機器の導入を図ってきました。

昭和四十五年四月には、現在の高岡市立看護専門学校の前身である「高岡市高等看護学院」を開校し、看護師の養成にも携わっています。その後医療体制の整備・拡充、医療機器の充実を図る中で、疾病構造の変化や地域住民の要望にこたえ、高岡医療圏の基幹病院として地域医療に取り組んできました。

自治体立病院の使命を担う病院として

昭和五十三年九月高岡市救急医療体制が発足し、高岡医療圏の救急輪番病院の一つとなり、平成八年十一月には、地域災害医療センター（災害拠点病院）の指定を受け、さらに平成十年七月には富山県精神科救急医療体制に参画するなど「地域社会と共存する病院」として、時代に的確に対応した医療体制の充実と機能整備を進めてきました。しかし病院施設の老朽化、狭隘化は致しかたなくなく、二回目の移転・新築となりました。それが現在の高岡市民病院です。平成十一年最新の医療機器を導入し、新たな病棟と中央診療棟で様相新たにスタートしました。翌年に外来診療棟を運用開始し、現在の診療体制を確立しました。院内情報システムの整備としては、平成十年に薬剤情報システムとオーダーリングシステム、平成十一年には看護支援システムの導入、その後も電子カルテシステムを導入し、経営面からの分析も可能としました。

現在の本院の診療体制は、二十二診療科四七六床（一般病床四〇八床、精神病床五十床、結核病床十二床、感染症病床六床）の総合病院で、七対一看護体制、ＤＰＣ適用病院、地域がん診療連携拠点病院、地域災害拠点病院、二次救急病院、臨床研修指定病院、院内ＩＣＵ・ＨＣＵ、緩和ケア病床を有しています。一方人材育成面、特に〝がん〟診療に関わる認定薬剤師、検査技師、認定看護師、診療情報管理士の育成に力を入れ多くの有資格者を育てています。

新病院完成から十年経過し、平成二十一年度からは四か年計画で高度医療機器の計画的更新にも取り組んでおります。また病院機能評価（Ｖ．５）認定更新、〝地域がん診療連携拠点病院〟の指定更新などを通して病院を活性化し、新時代に対応出来るように進化させてきました。

私達の目指す病院づくり

これまで本院の病院憲章に掲げる「生命の尊重と人間愛を基本に、心がかよいあう医療を提供する。」を基本理念に、高岡医療圏三十三万人の基幹病院としてまた地域の人々が〝安心して古里で一生暮らせる〟地域づくりに貢献するため、医療機能を充実させ、救急・精神・感染症といった政策医療を積極的に担ってきました。今後とも自治体立病院の使命を果たすため、高度医療、政策医療を提供すると共に医療機能の分化・連携を推進し、切れ目のない医療を提供し、地域医療を支えていきたいと考えております。

そのために私たち病院職員は「患者さん中心のチーム医療」と、職員間の良好なコミュニケーションによる「安全・安心・納得の医療」を推進し、さらには良質な医療を提供するための健全経営を目指し日々奮闘していく所存です。

これからもどうぞ宜しくお願い致します。

（院長　澤﨑　邦廣　記）

教室だより

分子神経科学・統合生理学

研究分野の沿革

一九五四年、岩間吉也教授が第二生理学教室主任教授として就任されたのを始まりに、岩間教授の転任の後、一九六三年から一九七四年まで大村裕教授、一九七五年から一九九七年まで山本長三郎教授、一九九八年から二〇〇五年まで狩野方伸教授が就任され、二〇〇一年、金沢大学医学部医学科の大学院部局化に伴い、金沢大学大学院医学系研究科・脳医科学専攻・脳情報回路学講座シナプス発達・機能学研究分野となりました。二〇〇七年に櫻井武教授が就任された後は、現在の分子神経科学・統合生理学研究分野となりました。現在研究室には教員四名、技術職員一名、大学院生五名が所属し、教育および研究を進めています。

研究の紹介

研究室のテーマの一つが、G蛋白質共役型受容体（GPCR）のリガンドとなる新規神経ペプチドに関する研究です。GPCRには、その内因性のリガンドが不明な受容体である〝オーファン受容体〟が多数存在します。GPCRは創薬のターゲットとしても重要であり、その内因性リガンドを見つけることは新しい生理機能を知る手がかりとなると同時に、新しい薬の作成に貢献できる可能性があります。当研究室ではオーファン受容体の内在性リガンドとしての生理活性ペプチドの探索と、新規神経ペプチドの生理作用の解明を進めており、特に摂食行動、睡眠覚醒、情動に関する機能について研究しています。また、別のテーマとして、生物時計についての研究を行っています。特に摂食によって調節される生物時計について研究しています。今回は、新規ペプチドとその受容体および生物時計についてご紹介します。

一、オレキシン

オレキシンはオーファン受容体の内因性リガンドとして一九九八年に櫻井教授によって同定された神経ペプチドです。その後の研究から、オレキシン欠損マウスは睡眠障害を起こし、さらにヒトのナルコレプシーと呼ばれる睡眠障害の原因は、オレキシン機能の欠損であることが明らかになりました。オレキシンを生成するオレキシン神経は、覚醒調節領域に出力し、それらを活性化することで、適切な覚醒の調節を行っています。覚醒調節を行うために、オレキシン神経の活動は、多くの入力によって調節されており、例えば睡眠覚醒に重要な神経核や、情動に重要な領域からの神経入力を受け、またグルコースなどの体内のエネルギー状態に関わる因子によって活動を調節されていることが分かりました。すなわち、オレキシン神経は体内環境及び外部環境から入力を受け、それに応じて覚醒領域を活性化し、覚醒すべきときに覚醒できるようにしていることが明らかになりました。そしてオレキシンがなくなると、状況に応じた適切な覚醒ができず、通常では寝ない場面でも寝てしまう、ナルコレプシーという睡眠障害になることが分かりました。またお腹が空いたり、感情的な刺激があると目が覚めることも、オレキシンを介した経路が重要である可能性が示されました。現在、オレキシン受容体を標的とした薬が作られており、臨床応用も期待されます。

二、ニューロペプチドB、ニューロペプチドW

ニューロペプチドB、ニューロペプチドWはGPR7というオーファン受容体のリガンドとして同定されました。その後、GPR7欠損マウスにおいて社会性行動の異常が見られ、GPR7は社会性および情動行動に重要と考えられる知見が得られてきています。正常マウスは、初めて見るマウスには適切な距離をとり、相手を観察しますが、GPR7欠損マウスは見知らぬマウスでもすぐに距離を縮め、執拗に接触することが観察されました。また、GPR7は快不快を判断する扁桃体に多く発現していることからも、情動に関与している可能性が考えられました。興味深いことに、ヒトのGPR7には一塩基多型が存在することが分かり、多型を持つ受容体は、機能が減弱していることが明らかになりました。さらに多型を持つ人と持たない人では、人の様々な表情の顔写真を見たときの扁桃体の活動に差があることも分かり、GPR7はヒトの社会性行動にも重要である可能性が示唆されています。

三、摂食に同調する生物時計〝腹時計〟

生物は体内時計を持っています。最も有名なのが光の刺激により調節されるもので、これにより例えば、夜行性のマウスでは昼に眠り、夜活動するリズムを作り上げています。しかし、マウスに休息時間帯である昼の一定時間にのみ餌を与え続けると餌の時間を予測し、その少し前から活動を始め、給餌時間内に餌を食べるという光のリズムとは異なるリズムが出来上がります。これは、光に同調する時計ではなく、食事に同調する時計が動き、リズムを作ったためだと考えられます。この言わば〝腹時計〟を作り上げている領域は確定されていませんが、光による時計とは異なる脳の部位が重要であることが明らかになってきました。動物は環境に応じて摂食行動を適切なタイミングで行う必要があります。またヒトでは食事の時刻などの生活様式と健康との関連が注目されています。〝腹時計〟がいかにして食欲・摂食行動を支配するのか、その神経機構を明らかにすべく研究しています。

上記以外に当グループが二〇〇六年に同定したQRFPというペプチドについても解析を進めています。今後も新たな生理活性物質の同定や、その生理機能を解析することで、未知であった生理機能を明らかにし、生理学分野の発展に貢献できるよう努めて参りたいと思っております。今後とも同窓会員の皆様のご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

（辻野　なつ子　記）

教室だより

医療経営学

研究分野について

医療経営学分野は、附属病院に設置された経営企画部に所属する教員を母体として、医学類の講義と医学系研究科の協力講座としての研究・研究指導・授業担当をしています。二〇〇八年度に協力講座となってから日も浅く、二〇一〇年になり教員の構成も落ち着きつつあるところです。

教員は、病院運営にかかわる医学・医療以外領域で運営の高度化を推進するため、院内のコンサルタントとして支援をしています。このため、教員の専門性は、それぞれの医学・医療以外に専門領域をもち、これに加えて医師である教員はそれぞれの診療領域での専門教育訓練を経ています。このように、経営企画部は情報化やコンプライアンスの厳格化、医療政策の変化など、急速に変化する社会の変化に大学病院が適切に対応できるように、専門的知識で対応することを支援しています。

今回は分野の紹介として、附属病院の組織としての変遷など沿革を中心に紹介させていただきます。

左より　越後、永藤、長瀬、山岡

（沿革）

一．医学部附属病院医療情報部の設置

経営企画部の教育・研究の歴史は、一九九二年に文部省訓令により教授職一、助教授職一が助手定員二を配置換えすることにより、医学部附属病院に医療情報部が訓令施設として設置されたことにさかのぼります。

医療情報部は訓令組織化に先立ち院内措置として一九八六年より設置され、山口成良部長（神経精神科教授）の下に教官、技官、事務官が併任で情報システムの導入を進めました。一九九二年の訓令組織化に伴う専任教官として佐藤保教授が就任し、分校久志助教授（専任）とともに、教育・研究組織として発足しました。附属病院の医療情報部は、病院情報システムの導入・運用の高度化を推進し、最終的には電子カルテを導入しました。佐藤保教授が定年退官された後、二〇〇八年に現教授の長瀬啓介が着任しました。

二．医学系研究科医療経営学講座の設置

二〇〇八年より医学系研究科の協力講座として、附属病院医療情報部の教員が大学院の教育・研究組織に加わることになり、医療経営学講座が設置されました。この時点では、学生もおらず、附属病院の新外来棟が工事中であるなど、旧外来棟に教員の居室がある医療情報部では研究室すらないスタートでした。このような中二〇〇九年一月に計算機科学を専門とする山岡紳介特任助教が加わりました。

二〇〇九年五月の附属病院新外来棟供用開始に伴い、附属病院医療情報部の場所が新外来棟に移転し、教員の研究室だけではなく、教育・研究組織として最低限必要な学生の研究室が小規模ながら確保されました。この新外来棟供用と同時に病院情報システムが更新されましたが、この両者により附属病院の外来業務の方法は大きく変化するとともに、病棟での業務も電子化が一層進行することとなりました。病院情報システムの更新作業が落ち着きつつある同年九月、本院の病院情報システムの導入初期から電子カルテ化まで永くご尽力されました分校久志准教授がご退職されましたことは、病院情報システムの運営上のパワーダウンでした。同年九月ころより、附属病院が社会的により高度な組織運営を求められ、医療経営学の教員がその専門性による組織運営実務への協力が緊急に求められる事態がいくつか生じました。

三．附属病院医療情報部の経営企画部への改組

このような社会的に高度な組織運営への要求の高まりを受けて、二〇一〇年二月に、附属病院医療情報部と経営企画部が統合されました。統合前の経営企画部は、院内措置で設置された全員が兼務の組織体でした。これを、時代の要請に応じ医療情報部の教育・研究機能を発展的に継承する一方、常設の組織として諸規程上は経営企画部を存続組織として、新しい経営企画部として組織統合がされました。二〇一〇年一月になり弁護士であり放射線科専門医の越後純子特任准教授が、同二月に計算機科学を専門とする永藤直行特任准教授がそれぞれ着任しました。現在の教員は全員が三十歳台・四十歳台で、教員としてはまだ未熟な若い構成となっています。医療経営学分野は附属病院経営企画部に所属する教員が母体となる一方で、通称として医療情報部という名称が残っています。

（業務の変遷）

このように、医療経営学講座に対応する附属病院旧医療情報部・現経営企画部の業務は、病院情報システムの企画調整、情報システムを利用する各種業務の抽象化・標準化と改善、病院情報システムが保有する情報の二次利用の一部として位置づけられる病院の経営分析と、業務拡大変遷し、それぞれの業務を担当する関連部署や事務組織とともに附属病院の運営基盤を支えてきました。現在は、①病院情報システムや院内ＬＡＮなどの病院の情報基盤の企画・調整、②法務、③経営戦略に関する分析と企画の立案という三領域の業務領域で附属病院の運営にかかわっています。

（教育研究）

以上のように、この二年間にわたり急激に機能・組織構成が変化しており、近時やっと落ち着きつつありますが、未だ教育研究で十分な活動ができているとは言えない状況です。現在は、医学類では三年次で医療情報学と特別講義、六年次で特別講義を担当し、薬学類で医薬品情報学を共同して担当しています。大学院では、研究生として一名を受け入れ、正規課程生向けの講義に対応できるように準備を整えました。

教員それぞれが、それぞれの専門領域の研究環境の整備を進めているところで、弱小分野ながら、金沢大学での研究成果に一行でも書き加えられることが当面第一歩の目標と考えています。皆様のご指導をどうぞよろしくお願いいたします。

（長瀬　啓介　記）

【支部だより】

愛知支部

平成二十二年五月二十九日（土）午後四時三十分より昨年と同様、名鉄グランドホテル北京宮廷料理『涵梅舫』にて、第二十四回金沢大学医学部十全同窓会の愛知県支部総会が開催されました。

今回は尾張地区担当でしたので同副支部長の吉尾豪先生（昭和四十五年卒業）から開会のことばを頂きました。そして、この一年の間に逝去されました松山克茂先生（昭和十七年卒業）、大場覚先生（昭和三十六年卒業）、浦田義夫先生（通常会員Ⅱ）、永瀬十郎先生（昭和二十三年卒業）のご冥福をお祈りし、黙祷を捧げました。

次に、支部長の中村暁先生（昭和三十八年卒業）が挨拶をされました。なお今回をもって中村先生は支部長を退かれることになります。今までどうもありがとうございました。引き続き篠田雅幸先生（昭和五十一年卒業）より会計報告があり、監事の横田徳久先生（昭和三十五年卒業）、大原教知可先生（昭和三十七年卒業）より承認されました。

そして協議事項として規約変更、役員改選が行われ、新支部長として尾山淳先生（昭和四十三年卒業）が就任され、伊藤健一先生（昭和五十一年卒業）、大原康壽先生（昭和六十年卒業）が新たに幹事に加わりました。今後ともよろしくお願いします。さらに水上哲秀先生（昭和四十七年卒業）により全学同窓会連絡協議会についての報告がありました。

近況報告として、去年と同じく十全同窓会理事長・金沢大学副学長である古川仭先生（昭和四十四年卒業）を金沢よりお招きして「全学学友会設立と創立百五十周年記念事業」についてお話して頂きました。平成二十四年は金沢大学創基百五十年にあたり、それに合わせて学友会の設立に向けての動きが具体的になってきたこと、学友会は既存の同窓会の一本化ではなく登録同窓会として加入する形となるであろうとのことでした。そして学友会は同窓会だけでなくそのほかの職域からの参加を募り、会員相互の親睦だけでなく、金沢大学をより強力に支援していきたいとおっしゃっていました。最近はあまり金沢に行く機会もなくなりましたが、こういった気運が金沢で高まってきていることを思うとやはり私としてもなんだか嬉しくなります。

その後、「岐阜大学での心臓血管外科六年とこれから」と題して岐阜大学大学院医学系研究科高度先進外科学分野教授の竹村博文先生（昭和六十年卒業）より講演がありました。岐阜は名古屋の植民地!?といったつかみに始まり、岐阜大学付属病院が医療を題材とした某映画のメインロケ地であるといったトリビアも。本題の心臓血管外科の領域では主にCABGにおけるグラフトについて動脈と静脈の違いやITAは冠状動脈と流れる位相が違うことなどからどんどん話を起こしていかれました。私は麻酔科医ですので身近な話でもあったのですが、楽しかっただけでなく、とても勉強になりました。

懇親会が春日井達造先生（昭和二十年卒業）の乾杯の音頭とともに始まりました。そしてその途中で初参加の内田一生先生（平成三年卒業）、澤田翔先生（平成二十一年卒業）より自己紹介をしていただきました。和やかな時間はあっという間に過ぎ、とうとう万歳三唱です。最年少の澤田先生は当直で先に帰られたため、今回はまた工野玲美先生（平成二十年卒業）にお願いしました。最後に伊藤健一先生より閉会のことばをいただき、それを持って散会となりました。

今回は三十七名にお集まりいただきましたが、次回はさらに大勢の先生方の参加があるよう願っております。

（近藤　俊樹　記）

高知支部

平成二十二年度高知県支部総会は、平成二十二年八月二十一日高知新阪急ホテルにて、山本博医薬保健研究域長をお招きし、開催されました。支部会員十九名中八名の会員が出席しました。総会に先立ち、物故会員、金子芳夫先生に黙祷を捧げ、御冥福を祈りました。岩崎英達支部長の挨拶の後、会計報告がなされ、次期幹事として竹内一八先生（昭和五十一年卒業）にお願いすることが承認されました。新入会員として、横矢隆宏先生（平成三年卒業）が紹介されました。引き続き山本博教授より、教授の最先端の研究成果、母校の現況、将来構想、および金沢大学医学部創立百五十周年に向けてと、スライドで詳しく御講演いただきました。そのなかで、郷土出身ジョン万次郎の長男、中浜東一郎氏が金沢大学医学部の前身である石川県甲種医学校長であったことが紹介されましたが、会員一同誰も認識なくおどろきでした。つづいて、岡部健一郎先生（昭和二十八年卒業）の乾杯の発声のもとに懇親会に移り、各会員の先生方から近況をかねて自己紹介をしていただきました。場所を変えた二次会には、山本教授も参加いただき、船戸豊彦先生（昭和四十八年卒業）の音頭のもと四高寮歌の合唱の後、散会となりました。

（横田　哲夫　記）

出席者

前列左から：岡部健一郎（昭和二十八年卒業）、市川博和（昭和四十二年卒業）、山本博教授、岩崎英達（昭和三十七年卒業）、横田哲夫（昭和四十九年卒業）、

後列左から：横矢隆宏（平成三年卒業）、船戸豊彦（昭和四十八年卒業）、山岡昭宏（平成二年卒業）、竹田修司（平成六年卒業）

福井支部

平成二十二年八月二十九日（日）第六十一回十全同窓会福井県支部総会が敦賀市支部の担当で敦賀市観光ホテルで開催されました。本部からは佐藤保十全同窓会会長、山本健十全同窓会理事、特別講演講師として井上正樹医薬保健研究域医学系分子移植学（産婦人科学）教授をお迎えいたしました。福井県内からは三十五名の会員が参加されました。

総会前のエキスカーションは、気比神宮を参拝し、大宝二年（七〇二年）の古からの由来を宮司より説明を聞き、更に西福寺に参り、堂内を見学しました。全山が国の重要文化財に指定されており、遡っては若狭一円に檀家をもつ壮大な名刹で、一同感銘深くその由緒に聞入りました。

特別講演は井上正樹教授から「テロメアバイオロジーに基づいた癌の治療戦略」と題して、染色体関連のがん治療の問題、人工授精関連更に前年のノーベル賞のテロメア研究にも及びレベルの高い内容に会員一同充分に満足の様子でした。

総会では、西浦幸男福井県支部長の開会の挨拶で始まりました。今年度は福井県では幸いに物故会員はなく早速議題に入りました。佐藤保会長、山本健理事により、附属病院の現況、文部科学省との経済問題、来年の医学部百五十年記念誌編纂および記念事業、更に十全同窓会の会員が増えない悩みなど話題になりました。百五十年記念の為の募金の協力を要望されました。

記念撮影の後、敦賀支部の竹内桂一の挨拶に次いでベル・リジョイス（敦賀ハンドベルグループ指揮・梅木仁司）演奏の爽やかな音色に雰囲気が盛り上がったところ、中村道直先生（昭和十八年卒業）の乾杯の音頭で懇親会が始まりました。

会員一同終了まで時間を忘れ和やかなひと時を過ごしました。

最近の会員の主な動向・敦賀市立敦賀病院院長池田孝之先生が平成二十一年三月三十一日退任、四月一日米島學先生が就任されました。

最後に次期開催地福井市高志地区代表宮森勇先生のご挨拶があり再会を期し閉会いたしました。（竹内　桂一　記）

山梨支部

平成二十二年度（第十三回）金沢大学医学部十全同窓会山梨県支部総会が九月四日（土）、例年と同じ甲府の老舗ホテル、古名屋ホテルで開催されました。今回は、賛助会員を除く正会員二十一名のうち十四名が参加し、横浜ご在住の柳澤和幸先生（昭和三十八年卒業）が出席してくださり、田辺譲二先生（昭和四十七年卒業）の奥様、文子様も出席され、さらに講演をお願いした内潟安子東京女子医科大学糖尿病センター教授（昭和五十二年卒業）にも加わっていただき、総勢十六名という賑やかな会になりました。今年度は幹事の怠慢で佐藤保十全同窓会会長に出席のご依頼をするタイミングをはずしてしまい大変残念に思っておりますとともに、支部会員の皆様にお詫び申し上げます。

内潟教授のご講演は「日本人とインスリン自己免疫症候群とα-リポ酸」というご演題名で誘発性低血糖症に関する内容でした。その発症にＨＬＡが関与していること、また誘発薬剤にメルカゾールやタチオン、さらには近年話題のanti aging supplementであるα-リポ酸があることなどが紹介され、非常に興味深く聞かせていただきました。内潟先生のますますのご活躍をお祈り申し上げます。

加田幸治名誉支部長（昭和二十九年卒業）の乾杯の御発声の後懇親会に入りました。今年も飲み物の主役はルミエールの赤・白ワインで、どんどんボトルが空になりました。内潟先生もワインと同級生の向井恵一先生（昭和五十二年卒業）との会話を堪能されておられたようです。

最後に集合写真を撮りました。幹事の

ミスで二年連続支部便りに支部会員の写真を掲載することができませんでしたが、今回はこのようにすばらしい写真が撮れてホットしております。

写真撮影後、会もお開きになりましたが、皆さん三々五々二次会へと行かれたようです。私は去年と同様淺川武彦先生（昭和四十二年卒業）、さらに今年は栗山健吾先生（平成八年卒業）もご一緒に歌の練習に励みました。来年度は幹事の都合で例年より一週間遅れの九月十日に会を持ちたいと思います。

集合写真には、急用でお帰りになられた松澤高光先生（平成十八年卒業）、松澤仁先生（昭和五十三年卒業）、田辺文子様はいらっしゃいません。せっかくですので集合写真で会員をご紹介いたします。

本文中に記載された先生はお名前だけ、また敬称は略させていただきます。前列向かって右より、秋山嘉門（昭和四十四年卒業）、柳澤、小林哲郎（昭和四十九年卒業）、内潟、加田、淺川、後列向かって右より、向井、藤井秀樹（昭和五十四年卒業）、秋山敬（昭和五十年卒業）、田辺、蜂須賀所明（昭和六十二年卒業）、栗山　（藤井　秀樹　記）

能登支部設立総会

平成二十二年十月三日（日）和倉温泉「のと楽」にて「能登支部」の設立総会が行われました。これまでは、「七尾鹿島支部」で年一回の総会を行っていましたが、支部長の佐原吉博先生の働きかけで、能登北部および羽咋郡市を入れて能登一円の同窓生を包括する組織として「能登支部」を作ってはどうかという話になったわけであります。まず、昨年七月十五日に「七尾鹿島支部」の臨時役員会を開催して協議がなされ、「能登支部」の設立が合意され、続いて十一月八日に「能登支部」設立役員会が開催されて「能登支部」の設立についての話し合いがまとまった次第です。

今年度に入って設立総会の準備に取り掛かり、本部の山岸浩子さんからも資料提供をいただきながら名簿の整理に取り組み、一四三名の会員の名簿を作成できました。総会開催時期については、七月の十全同窓会・総会が終わってからと考え、調整の上で十月三日に決定致しました。また、本部からは十全同窓会理事長の加藤　聖先生においでいただくことでお願いに上がろうということになりました。

総会当日は、十九名の会員が集まって佐原吉博先生に議長を務めていただき、支部の名称決定、規約の承認、支部長の選任、役員の選任と構成、今後の活動などについて協議を行い、支部長は佐原吉博先生になっていただくことになりました。規約、役員も承認され、今後の活動については、年一回の総会を開いていくことになりました。ただ、今回の出席者には若い先生方が少なく、次回から若い先生方にも参加していただけるような工夫が出来ればとの意見も出されました。

その後、加藤　聖先生からの講演として、金沢大学医学部および附属病院における現状を説明していただきました。また、二年後に創立百五十周年を迎えるとのお話、キンストレーキの修復のお話などをいただき、最後に先生の教室での研究の一端として、中枢神経の再生に関する研究について分かりやすく説明していただきました。会員全員が臨床医でもあり、このような基礎医学の研究についてお話を聞く機会があまりない中で、とても新鮮な気持ちで聞かせていただいたとの感想でした。

その後、写真撮影を行った後、懇親会に移り、和やかな中での宴会となり、会員の自己紹介と現況について皆さんにお話をいただきながら、盛会のうちにお開きになりました。（川口　光平　記）

京都支部

二〇一〇年十月十六日（土）六時から例年のごとく京都・南座の北、川端通り白川の「京新山」で行われた。一昨年福知山で京都支部総会を開催してくださった昭和三十五年卒業の松山均先生も参加してくださり、出席者は七人。本部から送られてきた金沢大学の広報誌「アカンサス」を見ながら大学の現状に目を向け、また医学部創立百五十周年記念の寄附についても話が出たが、あまり景気の良い話はでなかった。松山先生の乾杯の音頭で宴会が始まり思い思いに話が弾み、松山先生は正統俳句を通じて、いろいろな人との付き合いと視野の広がりを、また桑原先生は草津総合病院の院長として経営の難しさをそれぞれ熱く語っておられた。十全同窓会会報の編集長の山本健先生が企画しておられる、今の若い人が知らない先輩の昔の苦労話などを載せるコーナーへの京都からの推薦者を辻先生の提案で京都市伏見区在住の昭和十七年（専）卒業の渡邊正男先生にお願いすることにした。来年は十全同窓会関西支部総会が京都で開催されることになり小野聡先生、辻和夫先生が準備を着々と進めてくれている。来年の本会の盛会を祈念し再会を楽しみに宴を閉じた。

（支部長　八田一郎　記）

クラス会

双六会
（昭和二十六年卒業）

平成二十二年九月二十五日、粟津温泉法師旅館で開催した。八十四才八十五才のロートルであり、十名が参加した。ただ村上誠一君（金大麻酔科初代教授）が昨年急逝され、彼は双六会の名付け親でもあった。

物故者は卒業者約八十名の中四十名である。お互い歓談はつきることなく、旧交を温め楽しく過ごした。

翌二十六日、自動車博物館と安宅の関を訪ね、弁慶と関守とのやりとり等、又、白紙の勧進帳を読みあげる等義経主従が奥州藤原氏の許へと落ちる過程が取り上げられた。

参加者十名は徳田、出口、白山、中嶋、丹尾、中川、松下、鈴木、石田、高野である。

次回幹事を鈴木、石田君を指名した。

（高野　昭夫　記）

「而立会二〇一〇」
（昭和二十七年卒業）

「而立会二〇一〇」は金沢在住の五名の世話人が春三月に企画した案に従って十月二十三日夕、料亭「つる幸」において催された。昨年は夏までに四名の級友が相次いで逝去し傘寿を超えた身には寂寥感と無常の思いが迫っていた。「而立会」の名はいうまでもなく論語の

〝吾十有五而志于学、**三十而立**〟

に由来するが、わたしたちの齢はすでに「七十而従心所欲不踰矩」をはるかに過ぎて名付けの大矢君は疾うに逝きこの世にはいない。この秋は二十一名（麸、梅崎、織田、太田、小林、関、恒元、富田、長林、西田、宝達、前田、道下、山口、竹田、同伴者五名）の参加を得て会を開くことができた。幸い小林君は岡山からの長旅を圧うことなく来沢され意気軒昂たる姿を見せてくれた。

第一日は、織田君の司会のもとまず麸君が話題提供として

『「**戦時体制**」と「**官立金澤医科大学**」』

と題し、医学部がその濫觴から明治、大正、そして昭和の戦時、終戦後にかけどのような学制の変革をたどってきたか、例えば教授の応召（精神科・早尾乕雄教授、一九三七年）、一九三九年春、唐突な電話一本の通達で臨時附属医学専門学校を設置（七帝大及び旧六）せざるをえなかった逼迫した国状（軍の要請）や戦時に科学動員政策に沿った教授の科研課題、入学志望者の激減への対応（一九四二年）、医大生を南方医事行政学校研究所の経営等に参画させたいとの軍の画策（一九四二年）に対し積極的対応を好まなかった石坂伸吉学長の気骨ある人柄などについて克明な調査をもとにいくつかの逸話を紹介した。

宴会は、山口君の「さらに齢の倍、一六二歳まですこやかな長寿を願いたい」との言葉のあと、Goetheが賞でたというイタリアン・ワインLacryma Christiで乾杯し、なごやかな雰囲気のうちに老耄の肚裡に沁みる「つる幸」ならではの秋の酒肴を満喫した。任意のスピーチでは、なお診療・検診活動に就いているもの、音楽、オペラ、ツアーの趣味に老後を楽しむもの、あるいは病を克服しつゝあるもの、人それぞれであるが、究極、人はいかに老いてもthe womb（発生するところ）に帰るというべく、母への慕情を述懐する方もあった。酒豪もいないので「つる幸」からお祝いにと戴いた中村酒造の銘酒「大吟醸」が皆をほどほどに酔わせるに十分であった。私は密かに皮膚科の川村太郎教授のポリクリ・グループの眼差しが一斉に着物姿の一女性患者の患部に集中している写真の場景とレンブラントの名画「Tulp博士の解剖学講義」の構図との相似性に〝学ぶ者の真剣さ〟を感じ若き日をしのぶ懐古の栞として席に添えた。

第二日は、日曜日に拘わらず大学事務方のご好意に甘えて資料館を開けていただき平成の修理を了えた「キンストレーキ」と、その修理過程を示すスライド・ショーを観覧することができた。二〇〇九年に完成した資料館の収蔵品リストと照合し他の展示品についても学ぶところがあった。昼は、「しいのき迎賓館」のカフェ・Paul Bocuseにて特別メニューを味わいながら、金沢を離れた人には変貌をとげつゝある金沢の新風景を感じてもらった。

わたしたちは、金沢で卒後五十周年（二〇〇二）を祝ってから浜松、東京、高岡、金沢、仙台、蛸島（能登）、福光と会を

重ねてきたが、二年後の開学百五十周年にはあたかも華甲を迎えることになる。

〝歳月の来たり、また去ることは、なんと速かなのであろう〟

（Raabe: Die Chronik des Sperlingsgasse　伊藤武雄訳）

と巡る会ごとに喪った友を回想しつくづく老残の想いを深くするのである。

「而立会」は卒業記念のモニュメントについて当時の医学部長・井上剛教授のご示唆を仰ぎ、学生諸君への啓示として医学の道こそ〝荊棘の道を拓く〝Make a Way through Thorny Rose-Gate〟ことにあるとの意思をこめて「バラのアーチ」を贈った。今ではアーチは錆びバラの木は枯れ果てたので開学百五十周年を控えアーチの整備とバラを再植しなければならないと願っている。それを忘れないためにもと、バラに因む縁にGoetheが作った詩「野ばら」のモチーフとなったストラスブルグ時代の恋人Friedercke Brionの末裔にあたる画家Gustave Brionが描いた名画「女性とバラの木」のコピーを記念の引き出物に代えた。

世話人・広根君が提案し次回の「而立会」は明後年、開学百五十周年に合わせ計画することを申し合わせた。

池森順一事務部長はじめ資料館の見学でお世話いただいた事務各位に深謝申し上げます。

（竹田　亮祐　記）

「さんご会」（昭和三十五年卒業）

昭和三十五年卒業のクラス会も今年で四十八回を重ね、初期の二回を除き、毎年各地を巡り、各々の幹事の尽力により行われて来た。今回は、平成二十二年九月十八日に金沢市の金沢ニューグランドホテルで実施されたが、現会員の過半数以上の三十三名と、令夫人を含む四十七名の多数の参加となった。ところで、我々のクラスは本年で卒業五十周年に当たるので、以下の如き三つの記念行事を実施した。即ち、尾山神社における健康祈願、ふるさと偉人館館長の松田章一先生による記念講演、更に藤舎流の藤舎眞衣先生の笛演奏の拝聴であった。いずれも、心にしみるものがあり会員一同感銘を受け、また好評を得た。

この五十年間に二十一名の会員が他界し、出席者一同心から御冥福を祈った。佐藤会員による十全同窓会記念事業の説明、梅田会員による会計報告の後、前回幹事の横山会員による乾杯の音頭で懇親会に入った。声帯模写の（講義を受けた教授の）余興や光風会への絵画入選披露などがあり、和やかな歓談の時を過ごした。二次会では各人が自慢ののどを響かせ、元気のよいところが顕わされた。翌十九日に、奥能登観光として曽々木海岸から総持寺を訪ね、青春時代の記憶を蘇らせた。一方、二組の参加者を得たゴルフが片山津GCで行われ、各人のいまだ元気なことが示された。

人生、いやお医者五十年、まさに時の流れの早いことが感じられ、他方、一炊の夢を思う此頃である。今回の記念写真にみられる会員達の顔は卒業時のそれと基本的に変わるものではないが、この五十年間の人生が深く刻まれている如くみられ、感慨深いものがある。次回は、伊与会員と坂上会員の両幹事による奈良県での開催が予定されているが、会員いずれも元気に会えることを願って筆をおく。

四十八回幹事：梅田、松原、佐藤、筑田、半田、山崎、木南

（木南　義男　記）

三八会（昭和三十八年卒業）

二〇一〇年十月九日に洛北・宝ヶ池のグランドプリンスホテル京都で開催された。夫婦同伴十組を含めて総勢三十人の参加。中西君の会計報告に続き、内田君と弓削君の二人の死亡報告を受け全員で冥福を祈った。

宴会は秋田から参加の寺邑君も間に合って賑やかな宴となった。島根から参加の倉塚君が安来の「ゲゲゲの鬼太郎」の酒を提げてきて、みんなで分け合い味わった。二次会はアスコット・バーで二十人予約が満席になり十一時まで賑やかに語り合った。

翌日は二十七人が大原三千院そばの宝泉院で五葉の松の古木の庭を眺めながら坊主の説明を聞きつつ抹茶を味わった。自由行動で、隣接する勝林院で宗教音楽「声明」を聞きながら阿弥陀如来に合掌するもの、三千院の拝観のあと、門跡の書を手に入れるもの、健脚組みは「音なしの滝」まで行くものもあった。呂川を下りながら途中コスモス畑に上がり、花越しに段々畑のかなた、寂光院の「草生の里」を見下ろす。

昼にはホテルにもどり、中華バイキングのあと来年の再会を楽しみに帰路に着いた。なかには、これから京都市内のお

寺を訪れるもの、奈良に行くもあり、みんな元気。

しかし、一年前に案内を出したときは四十三人の応募があったのにその後体調を崩す人が何人かあり、返信の葉書をみんなで見ながら体調の回復を願いつつ、参加できる自分たちの健康に感謝した。来年は神奈川県での開催の方向で話が進んだ。

四〇会（昭和四十年卒業）

卒業四十五周年同窓会

平成二十二年度の四〇会は十一月六日（土）に金沢市内のホテル日航において開催された。当初、会はほぼ四年毎の不定期なペースで開かれていたが、還暦を迎えてからは毎年開かれている。今年度の出席者は北陸三県および遠来勢（神奈川・静岡・愛知・新潟・岐阜・京都・大阪）の三十五名であった。開宴に先立ち出席者全員による記念写真撮影を行った。会は世話役の斉藤建二君の司会の下に行われ、まず物故者の冥福を祈り黙祷を奉げた後、幹事代表の加藤彰一君の開宴の挨拶、次いで熊木克治君の発声による乾杯で始まった。また翌日に予定されているゴルフコンペ（参加者十名）と金大医学部創設期史跡巡り（参加者七名）の案内が、それぞれの幹事の藤本啓太郎君、福田龍二君から紹介された。

会は配られた欠席者の近況コメントを記載したリーフレットにも目を通しながら、料理とアルコールで盛り上がり、打ち解け和やかになったところで席順の一番を引き当てた樋口雅章君から順次、学生時代などの懐かしい思い出話、自分や家族の事等々の近況報告がなされた。現役で頑張っている者、趣味と実益を兼ね医業を続けている者、海外旅行や悠々自適・晴耕雨読を楽しんでいる者など、大変興味深く、それぞれが多彩な充実した日々を過ごしていた。しかし、病気体験など話題は健康に関するものが多く、お互いに健康には留意しなければと頷き

あった。話題は尽きなかったが中締めを越野好文君が務め、一本締めで閉会となった。一次会の余韻を楽しみながら二次会の席をホテル内のカフェに移し、一気に昔話などに花を咲かせた。歓談は尽きることなく、時間の許す限り夜遅くまで旧交を温め楽しく過ごし、来年の再会を約束し散会した。

翌七日のゴルフは、名幹事藤本啓太郎君のお世話で片山津ゴルフ倶楽部日本海コースで開催した。参加した岩城紀男君からの知らせによると、当日はアキアカネの飛ぶ秋晴れに恵まれ、二日酔いもなんのその、和気藹々と楽しく回ったという。尚試合は十七番ホールで放った第二打をカラスに奪われ、追いかけて辛うじてボールを回収するという珍事にもめげることなく、岩城紀男君が優勝とベストグロスを獲得したという。史跡巡り組は、十全同窓会による金沢市近代医学史跡図などを参考に、福田龍二君の案内で彦三種痘所、卯辰山養生所、金沢大学医学部解剖塚、金沢医学館、石川県金沢病院、壮猶館などの史跡を訪れた。丁度この日は大学祭で、母校で医学展が開催され、また記念館資料室が開放されているとのことで、予定を急遽変更しこれらの見学もつけ加えることにした。資料室では山本博教授（医薬保健学域長）が居られ、いろいろ説明をいただき、母校の過去から現在までが繋がり一同大変満足したという。引き続き加賀石亭で昼食を摂った後解散した。

二日続けての好天に恵まれ、会を計画した者にとって何よりであった。

（篠崎　公秀　記）

医学部百五十年史のための覚え書【30】
百年祭に頒布された記念品

寺畑喜朔

百年史は後年代金納入者に送本された。ただし、学生版（二冊に分冊）五百部限定版として学生の希望者に送本された。

記念品はつぎのとおりである

一、「金沢大学医学部の百年」冊子、A5判十五頁、故西田尚紀教授執筆

二、銅製記念文鎮、前田家梅鉢紋、第四高等中学校医学部、金沢医学専門学校、金沢医科大学の校章をデザインする（写真右下、下段）

三、創立百年記念絵葉書、三枚（写真①～③）

四、記念たばこ（ピース十本入）一個（写真右下、上段）

五、医学部概要パンフレット

六、記念酒盃（赤絵九谷焼）

◇一般用は一～五、特別寄付者には六が追加された

なお、これらの記念品のうち、（四）、（五）、（六）は医学部地下倉庫に雑然と保有されていた。筆者所持の（一）、（二）、（三）とともに記念館史料室に展示した。

①医学館とその功労者である黒川良安。黒川の紹介で適塾で学び帰郷して黒川を補佐した津田淳三・田中信吾・大田美農里の三人の肖像

②医学部正門（昭和37年）

③当時の航空写真（昭和28年8月に病院改築の国家予算の一部が承認され、以後、逐年改築がすすむ）

学生課外活動支援報告

西日本医科学生総合体育大会

第六十二回西日本医科学生総合体育大会は、主管東海・北陸ブロック、代表主管校名古屋大学の運営のもとに、平成二十二年七月三十日～八月十六日に渡り開催されました。

今回は開催地が名古屋であり、前回の沖縄に比べ天候にも恵まれ、現地までの移動や宿泊の手配などスムーズに運ぶことができたかと思います。それだけに今回は多くの部活がより競技に集中し、実力を存分に発揮できたのではないでしょうか。そのためもあってか、今大会における金沢大学の総合成績は、参加四十四大学中十四位と、昨年の三十一位から大きく前進することができました。

この一年間を通じて、参加選手は結果だけではなく、その過程で大変貴重な経験をさせていただきました。この結果は参加選手の日頃の鍛練の成果であり、また、こういった私たちの活動にご理解を示し、ご支援を下さる十全同窓会の先生方のご尽力の賜物でございます。この場をお借りして、ご支援いただきました関係者各位に厚く御礼申し上げます。

来年度も金沢大学の名に恥じぬよう、選手一人一人が実力を向上させ、その成果を遺憾無く発揮できるように頑張ってまいります。今後ともご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

各部の主な成績

団　体

優　勝　スキー男子
　　バスケットボール男子
第六位　卓球男子
ベスト8　サッカー

個　人

優　勝　スキー男子
〃　陸上女子
第三位　スキー男子
〃　陸上男子
第四位　スキー男子
第五位　スキー男子
〃　陸上男子
第六位　スキー男子
第七位　スキー男子

（第六十二回西医体評議員　四年　森　佑介　記）

白山診療班活動報告

金沢大学医学部白山診療班では、白山室堂内での診療所において登山客と室堂スタッフへの診療ボランティア活動を五十年以上の間行ってきております。診療活動は医師である正班員の先生方が行い、副班員である医学生は先生の補助、清掃、スケジュールや物品の管理、厨房のお手伝いなどを行っております。本年度は七月下旬から八月末までの間に一四三名（男性八十六名、女性五十七名）の患者さんの診療を行いましたが重症例はほとんどなく活動を終えることができました。

ここ数年は入山して頂けるドクターの数が少ないことが問題になっておりましたが最近は副班員である学生の新入生が少なく厳しい状況が続いており、今年の夏山期間中にはドクターだけではなく学生も不在の日が何日かありました。今年度は一年生を中心に久しぶりに多くの新入部員を迎えることができましたが、経験者が少ないため、これからもしばらくは厳しい状況が続くことが予想されます。伝統ある診療班の活動を途絶えさせることなく継続させていくためには来年度以降も白山のよさを広く知ってもらうように活動を行っていきたいと考えております。

このような貴重な活動に参加させていただき感謝するとともに、これからも末永く活動を続けて参りたいと考えております。お蔭様で今年度も無事に活動を終えることができましたが、診察にあたられた先生方、本当にありがとうございました。また白山観光協会の方々をはじめとしてご協力いただいた関係者各位、援助やご協力をいただいております十全同窓会の皆様方にもこの場をお借りしてお礼申し上げたいと思います。お世話になり本当にありがとうございました。今後ともご指導ご鞭撻の程どうかよろしくお願い申し上げます。

（四年　米澤　宏隆　記）

立山診療班活動報告

立山診療班は富山県の立山にて夏期限定で活動を行っています。観光客、登山客が集まる山の名所で私たち診療班は無償で疾病や事故に対応しています。

診療班員である学生は診療所で主に医師の補助を仕事としています。しかし常に患者さんが来るわけではないので、炊事や山小屋付近の清掃、キャンプ場の受付を行っています。先生方や山小屋関係

者の方々の協力もあり、立山という大自然に囲まれて私たち診療班員は貴重な体験をさせていただいています。

今年度は前年夏に比べ梅雨明けが早く、登山客の増加から患者数の増加が見込まれていました。しかし最も患者数が増えるお盆休みに台風による悪天候があり、患者数は昨年度よりも減少となりました。また今年度の診療班は、昨年に引き続き診療所を三箇所（室堂、雷鳥沢、剱沢）担当することとなりました。それに伴い、昨年度まで雷鳥沢、剱沢の二箇所の診療所に滞在していた学生は室堂にも滞在する予定でした。しかし入山してくださる医師の人数不足を学生で補うこととなり、医師は患者数の最も多い室堂診療所に、学生は雷鳥沢、剱沢診療所に優先して滞在することになりました。その結果、多くの学生が医師不在時に患者さんに対応することになりました。もちろん直接的な医療行為はできませんが、自分達だけで患者さんから情報を聞き取ること、カルテを書くこと、医師へ引き継ぐことなど多くのことを学ぶことができました。しかし、医師不足は深刻な問題となってきています。この同窓会会報をご覧になられている診療班ＯＢの皆様、ぜひ来年度入山していただきたく存じます。

最後になりましたが、ＯＢの先生方をはじめ、活動を支援してくださった十全同窓会の皆様に厚く御礼申し上げます。

（四年　小林　拓　記）

ACLS金沢活動報告

ACLS（Advanced Cardiovascular Life Support）金沢では、BLS・ACLSを中心とした救急蘇生法についての知識や技術を習得するために、学生同士で勉強会を行っています。BLS（一次救命処置）である心肺蘇生・AEDを用いた除細動・窒息に対する気道異物除去などの基本的な技術から、気管挿管・静脈路確保と薬剤投与、心電図判読・除細動などといった高度な治療を用いたACLS（二次救命処置）まで幅広く学んでいきます。講義だけでなく、実際に治療に用いる機材を使って手技練習をするので、より臨床に近い体験ができます。

全国の多くの医学部にACLS部（サークル）があり、それぞれの大学が開くワークショップ（WS）に参加しています。ACLS金沢も、本年度の六月にWSを開催しました。北陸・東北・関東・東海・関西と、全国から仲間に集まってもらい、総勢約九十名でWSを成功させることができました。予習会では講義、口頭試問、実習を交えて学び、当日はシナリオに沿ってチームで治療のシミュレーションを行います。参加者からは「知識・手技だけでなく、シナリオを通して家族対応について考えるきっかけになった」との声もありました。

また、九月には白山石川広域消防本部の主催する救急フェアに、本学の団体であるライブエイド金沢と一緒に参加させて頂いて、心肺蘇生講習会を担当し、たくさんの市民の方々に心肺蘇生を体験して頂きました。この活動を通し、改めて多くの人に心肺蘇生を知って頂くことの重要性を感じました。このような活動が更に「蘇生の輪」を広げる一歩になると考えています。

最後になりましたが、私達の活動を支えてくださる救急部や麻酔科蘇生科、そして十全同窓会の先生方に感謝申し上げます。

（三年　田口　理恵　記）

Live Aid Kanazawa

Live Aid Kanazawaは、石川県の救急救命率を向上させようと市民の方々にBLS（一次救命処置）を普及する活動を行っています。

近年、多くの施設にAED（自動体外式除細動器）が設置されるようになりましたが、BLSを理解されている方はほんの一握りです。このような状況では、せっかく市民の救命救急への関心が高まっていても、救命率を向上させることはできません。

本サークルはこの現状を憂い、多くの方々にBLSを理解していただこうと積極的に地域へ出て活動を行っています。

活動は主に地域の公民館・保育園などでBLSの講習会を行っています。地域から〝講習会を行ってほしい〟という旨の依頼を受け、その地域で講習を行います。講習会ではその地域の特性を踏まえ、どういう状況が起こりやすいかを考えて

います。参加される方々はＢＬＳに非常に興味を持っており、〝○○の時にはどうしたらよいですか〟などと踏み込んだ質問をされることもしばしばあります。

そのほかにも、医学展や献血ルームと協力し、ＢＬＳの簡単なワークショップを行ったり、白山石川広域消防本部の主催する救急フェアに参加したりと、ＢＬＳを普及するために幅広く活動しています。

講習会の後には〝（実際に現場に出会ったときに）頑張ってやりたい〟〝（ＢＬＳについて）よくわかった〟という声がよく聞かれ、私たちもやりがいを感じています。その一方で、講習会の最中には〝実際にやっていいのか〟という不安の声も多く聞かれます。実際に、ＣＰＡ（心肺停止）時にＢＬＳを施行されていない例もまだ存在し、今後もこの活動を頑張らねば、と感じています。

最後に、私たちの活動を支援してくださる救急部の先生方、そして十全同窓会の先生方に感謝申し上げます。

（五年　草処　翔　記）

医学展開催御礼

医学展も終わり冬の足音が聞こえる今日この頃ですが、十全同窓会会員の諸先生方におかれましては、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。

先日開催されました二〇一〇年度医学展は、秋晴れにも恵まれ、推計三、〇〇〇人の来場者を迎え、盛況のうちに無事閉幕することができました。十全同窓会の皆様には、医学展開催に向けてご支援、ご協力を賜り、医学展実行委員会一同深く御礼申し上げます。

今年度の医学展はテーマを〝ＯＰＥＮ〟と掲げて参りました。このテーマには、医学展を通して地域の皆さんに金沢大学を身近に感じてほしい、そして、ヒトの体に潜んでいる不思議や感動を実感・体感することで、とっつきにくかった医学への扉を開くきっかけになってほしいという想いを込めておりました。

企画では、例年ご好評いただいている「健康診断」や「外科体験」に加え、聴診・打診などの手技を紹介・体験する「内科」、理学療法・作業療法・車いすの体験をする「リハビリ」などの七つの企画を、実際の病院にみたてて「模擬病院」という一連のものに致しました。また、テーマに基づいた、地域の皆様と共に作り上げた企画もありました。その一つである「気持ち企画」は、患者さんや医療関係者が日頃お互いに伝えられないでいる気持ちや意見を集めてパンフレットに掲載することで、お互いの信頼関係を深める一助になればという想いが込められた企画です。その他、「肺活量コンテスト」「サークルＫサンクスとのコラボ弁当」「人体迷路」など、来場者の方々が楽しみながら身体や健康について学べる企画を多数ご用意できたのではないかと自負しております。

昨年度に続いて開催された医学展ですが、ただ闇雲に開催することは避けたいという思いから、今年度も開催の如何から話し合い、医学展の意味や皆の想いを確認しながら準備を進めて参りました。そんな中、来場者からは、学生の対応や企画内容に満足されたとの声や、来年の開催を楽しみにしているとの声が聞かれ、医学展を開催して良かったと心から感じると共に、ご支援下さった皆様には改めて感謝の意を表したいと思いました。

医学展の向かう方向はまだ定まっておりませんが、斬新さを忘れず丁寧に向き合うことを積み重ねた結果、いつの日か大きな実を結ぶことを願いつつ、私たち新六年生も陰ながら支援していく所存であります。十全同窓会の皆様には、医学展の更なる発展のためとご理解いただき、ご指導、ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

（二〇一〇年度医学展実行委員長
五年　平木　咲子　記）

紛らわしいＤＭにご注意ください

会員の皆様から、左記のようなダイレクトメールが送られてきているとのご連絡を頂きました。

十全同窓会とは全く関係がございません。くれぐれもご注意くださいますようにお願いします。

十全昔話

敦賀市　中村　道直（昭和十八年卒業）

私は一九二〇年（大正九年）生まれの九十歳です。大正、昭和、平成の三世代を戦争と平和を体験しつつ今日まで〝生き延びて〟参りました。

生まれてから吾々の世代は軍隊一色にて軍事王国でした。新聞のニュースは毎日満州で支那で衝突つづきの事件を報道しそのうち真珠湾攻撃から大東亜戦争へと突入していきました。国内では若者も中年もすべて赤紙一枚の招集令状にて軍隊に狩り出されました。そして野戦で戦死、輸送船で撃沈され死亡。帰えることのない若き特攻兵士の出撃など。戦局は次第に傾きはじめその結果は各地で玉砕報道が数を増し国内は地方まで毎日毎晩米軍機のB29焼夷弾攻撃、P51の爆撃といよいよ内外共に追いつめられ広島、長崎の原爆投下そして八月十五日の終戦となりました。

その敗戦色濃い昭和二十年三月に徴兵検査員として長野県出向を拝命しました。軍司令部から私の担当は眼科検診と命ぜられましたが実は専門は内科であり加えて学生時代のポリクリには殆んど出席していませんでしたので驚きと困惑で胸がいっぱいになりました。

先ず金沢陸軍病院（現在の国立病院）で一週間の研修をうけました。講師は軍医中尉のA氏。我々研修医を前にして開口一番言われたことは「実は私の恩師がこの研修生の中におられるので全部教わるように」とのこと。その恩師とは東大眼科の講師でありA氏のお仲人さんでもありました。一週間の研修中先ず本当に視力が出ないのか見えるのかの検査方法を習得。視力の出ないものに病名をいかにするのかを学びましたが受診者に何のトラブルもなく無事終了しました。

徴兵検査の最中に驚いたこと二つ。

一．すべて丸坊主で受診する義務である中、一人だけ悠々と長髪で入室して来たものがいました。「どうして髪を切らないのか」と問うと「軍隊に入るのがいやだから」との答え。「馬鹿野郎！」とさけぶや役場職員が飛んできて曰く「実は彼は精神病にて退院したばかり」とのこと。言うまでもなく丙種と決定。

二．連隊指令官（大佐）が検査官軍医連を集め〇〇氏を丙種にせよと言う命令が下りました。陸軍大臣からの依頼ということでした。当然立派な体骼の甲種合格まちがいなしの人物であったが涙をのんで丙種に決定。あとで〇〇氏は陸軍省中将の子息であったと判明しこの様な状態では日本の将来ももう駄目かと痛感しました。

こうして長野県の各地の小さな町を巡回している間に八月十五日終戦を迎えることになりました。幸いに内地に居たため復員も早くやがて金大細菌教室に戻る事が出来ました。

昔の戦争体験者にとっては、願わくば核のない全人類和をもって地球を守り住みよい国づくりを願うのみです。

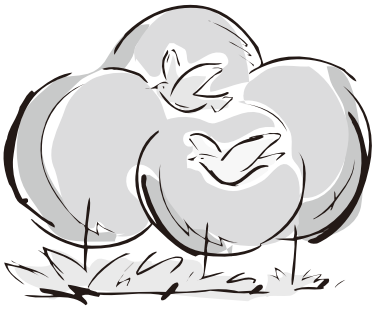
随想

長林　勝彦（昭和二十七年卒業）

今では大学と言えば六三制の大学しかありませんし、それを新制大学と呼んでいた年代の人も殆んどいません。しかしまだ生き残りがいましたが、先日九月十一日、西部偕行会といふのがありまして解散を決定しました。昔の陸軍の会ですがこれで修了することになりました。ここ二、三年この種の会が続きます。正に一つの世代の終焉の時なのでしょう。数年前の金沢大学同窓会に出ましたが、どうにか医学部も金沢大学医学部で違和感がなくなりつつあると感じました。ここ静岡の十全同窓会でも幹事が金沢大学医学部の卒業の方ですから今の若い方は全く違和感はありません。

それでいいのですが、この六三制は正に占領下のアメリカの政策として推し進められたものです。その学制改革は比較的無難に経過発展しましたが、それでよかったものと気をつけなければならないものもあります。戦後生まれの戦後育ちの方が極く自然になじんでいますが占領政策として実施されそのまま違和感を感じないで済んでいますが、もう一度考え直さなければならないものもいくつかあります。その最も大事なものが憲法です。これは完全な占領策そのものです。非常に立派な瑕疵のないものの様に思はれていますが、日本語としても英文翻訳そのものですし、正に占領政策の遺物に違いはありません。戦後六十五年も全科玉条の如く信じられてきましたが、やはり立派な日本語の自分たちの創ったものに直す必要があるのではないかと思います。戦後生まれの方々は立派なものと教えられそうかと疑うこともしない方が多いかもしれませんが、やはりこの辺で一回しっかり考え直す必要があるのではないかと思います。改正といふと九條だけと思ふ人が多いのですが、それも含め全部きれいな日本語で自分達の憲法に書き改める時期ではないでしょうか？少し前その流れが出来かかりましたが消えていきました。もう一度改正の必要を確信するものです。

金沢大学の会報に寄稿を求められ老の一徹から一文を草しました。



学生コーナー

今考えること

医学科四年　和田　明梨

気がつくと月日は流れ、四年生ももう終わりの方にさしかかっています。五年次のBSL（臨床実習）を間近に、目の前に負われた数々の試験をこなしていく一方、自分の将来像についてより現実的に考えたり、周囲の友人同士の間でも話す機会が増えてきました。

日々の講義や手技実習を通し、勉強をするほど医学の面白さや奥深さを感じ、時には未知の領域を突きつけられることもあります。また、日々医学の進歩を実感しているところであります。

今回、この寄稿を書くのは女子医学生では初めてということで、何について書こうか悩みました。しかし、私が女子医学生ということもあり、将来自分が女性医師として働くにあたり、現実に存在する問題、そしてそれを踏まえて自分がいかにあるべきかについて日頃考えていることをここで述べたいと思うに至りました。

普段この事を考えていると、今後自分が医師として一体何を目標に、どのような道を歩んでいくのか、どのように社会貢献できるのか、また一人の女性としてはどうか。結婚し、子供を産み、家庭を持つことになるのか、もしそうなった場合、仕事と家庭との両立は果たして可能なのかなど、未来への期待とともに漠然とした不安が脳裏をよぎってきます。いまや女性の社会進出、活躍が目立ってきた日本社会ですが、私たち女子医学生も、医師であり女性であり、現実社会で生きていかねばならないのです。そこで、一体何を重きに人生を歩んでいくか、現状はどうなのか、非常に関心をそそるところであります。私としては生涯を通して医師という立場で社会貢献したいと考えていますし、同時に家庭との両立をしたいと思っています。実際に私の周囲でもそのように考えている女子学生が多いように思えます。以前に、現役の女性医師の方々のキャリアや家事育児体験談、苦悩等を交えたお話を聞かせていただく機会が度々あり、私も参加させていただきました。そこで限られた時間を有効に利用して仕事と家庭を両立する女性医師が数多くいることが分かりましたが、それは周囲の人々の協力・理解あっての実現であるともおっしゃられていました。また、最近では職場でも育児や家事に対して理解ある男性医師が多くなり、以前に比べ女性医師が働きやすい環境になりつつあるのは間違いないとおっしゃられていました。しかし、家事や育児で自分の時間が限られるというハンディを背負うことになるのはやむを得ず、その中で仕事をこなさなくてはならないことへの困難を感じたという女性医師の方々も少なくありませんでした。

近年、医師不足と呼ばれる時代になり、その一因が女性医師にあるとされています。実際、医師全体に占める女性比率が最近十年間で急速に増え、近い将来二割を超えると言われています。この傾向は若い世代で顕著で、ある統計では六十歳代の医師における女性医師の割合が九・〇％であるのに対し、三十歳代では二十五％、二十九歳以下では三十六％と四割に迫っているそうです。つまり、四十歳以下の医師の三割が女性なのです。

しかし、女性医師では卒業後、働き続ける人は男性に比べ少なく、男性医師では卒後三十年目頃まで九〇％以上を維持しているのに対し、女性医師では卒業後三年目頃から徐々に低下、卒業後九年目ごろには約七十五％にまで落ち込むという統計もあります。つまり、女性医師の三十歳代での就業率の低下が現実問題としてみられます。

そしてその最大の理由がやはり、出産や子育てによる離職なのです。医師として働く反面、女性特有の妊娠・出産・育児というイベントも存在します。それと同時に、この時期に出産や育児で職場を離れると診療技術が低下する恐れがあります。そのために育児が一段落した後も復職をためらいそのまま医師をやめてしまう女性医師が多いのです。日々の進歩が著しい医学界であるからこそ生じる問題でもあるのです。また、復帰しても出産前と同様に働くのは難しく、復帰後の勤務体系が厳しいことにより第一線の医療現場から離れる女性医師も多く、再就業には多くの弊害が生じると思われます。しかし、それでも今後、女性医師がさらに増えるのは確実であり、このことは同じ職場で働く男性医師の負担へも影響するので、これは女性医師だけではなく医療界全体の問題なのです。

このような社会情勢を背景に、現在では、育休取得や保育所の整備、短時間の勤務形態、一時的な当直免除、女性医師の復職支援など女性医師が働く環境が整いつつあります。しかし、現時点ではこれらの制度を取り入れている病院は多くなく、自分の状況に応じて勤務先を選ばなくてはならないのが現状です。よってさらなる制度の普及が望まれます。また同時に女性医師の勤務、休業等が男性医師へのしわ寄せとなってしまわぬよう、男女問わず同じ職場の医師全体がチーム医療としての意識を持ち、互いの勤務を補い合いながら働きやすい環境づくりをしていく必要があると思います。そして、女性医師自身も、女性であるということに甘んじず、自分が一人の医師であるという自覚と、社会的責任を担っているということを常に念頭に置きながら過ごさなくてはならないと思います。医療崩壊をくいとめるためにも、医師が医業を続けやすいようにワーク・ライフ・バランスの改善を図り、医師全体の働き方を考え直し、女性医師、男性医師共に働きやすい環境が生まれることが望まれます。

最後に寄稿にあたり、自己の将来像を改めて自問すると、やはり現時点では漠然としており答えが見出せない部分も多いですが、少なくとも仕事と家庭の両立というビジョンを見据えた上で、残りの学生生活を心身ともに充実させ、地道に努力していく姿勢を維持していきたいです。

第四回ホームカミングデイを開催

角間の式典に二〇〇名　同窓会総会等に六〇〇名

温暖な晴天に恵まれた昨年十一月六日、角間キャンパス自然科学大講義棟で開催した第四回金沢大学ホームカミングデイの歓迎式典・記念講演等には、二〇〇名（卒業生・家族等一八〇名、学内役職員二〇名）が出席しました。

中村信一学長は歓迎の挨拶で、金沢城公園の中に「金沢大学誕生の地」の石碑を建立できたこと、また歓迎式典の出席者と合わせて六〇〇名を超える卒業生が大学と金沢市内に集う、文字どおりの「ホームカミングデイ」となったことを報告。続いて、同窓会を代表して竹田亮祐同窓会連絡協議会会長（十全同窓会顧問）が、「卒業学部・学科を超えて智慧を出し合い、学友会に結集されんことを期待する」と挨拶しました。

次回は今年十一月五日（土）学友会設立総会も

歓迎式典の閉会挨拶で古川俊理事・副学長（十全同窓会副会長）は、「次回のホームカミングデイを開催する十一月五日は歴史的な日となる。歓迎式典・記念講演会等の行事のほか、各同窓会の総会や『金沢大学学友会』の設立総会、各部局の企画行事などを終日展開する、より多彩で楽しいホームカミングデイとして発展させたい」と結び、再会を誓って散会しました。

出席者のうち七〇名は、五十間長屋で初めて開催された「金沢城内大懇親交流会」に参加し、青春の思い出あふれる懐かしの城内で杯を酌み交わして旧交を温め、校歌と四高寮歌の大合唱で最高潮に達していました。

（学友支援室長　西谷　公作　記）

金沢城公園内に建立された石碑「金沢大学誕生の地」

教授退職記念講演会・記念式のお報せ

本年度を以て退職される細胞浸潤学（歯科口腔外科学）山本悦秀教授の記念講演会ならびに記念式が左記のとおり開催されますので、ご案内いたします。

一．記念講演会

日　時　平成二十三年三月五日（土）
　　午後四時から
場　所　十全講堂　ホール
演　題　「医学科という一つ屋根の下で」
　　山本　悦秀　教授

二．記念式

日　時　平成二十三年三月五日（土）
　　午後五時から
場　所　医学部記念館　集会室

なお、本年度は経費節約等のため、醵金者宛招待状は発送されません。ご容赦ご注意いただければ幸いです。

（松井　修　記）

金沢大学医学部十全同窓会会報編集委員のご紹介

学内編集委員は、中村信一、加藤聖、山本健（編集委員長）、山本博、山岸正和、太田哲生、大島徹、中村裕之、和田隆志、佐々木素子、若山友彦の十一名。学外編集委員は、寺畑喜朔、山口成良、柿下正雄、津川龍三、興村哲郎、多留淳文、赤祖父一知、佐藤保、三輪晃一、橋本琢磨、勝田省吾、大村健二、横山仁、横山修、常山幸一の十五名。以上二十六名で構成されています。

本年もよろしくお願い申し上げます。

編集後記

十全同窓会会報編集委員長から会員の皆さまに新年のご挨拶を申し上げます。本年も会報へのご鞭撻とご協力をよろしくお願い申し上げます。

同窓会会報の役割には、母校の発展と会員各位のご活躍をお伝えする、謂わば公式記録の部分と、会員の個人的な想いを共有する私的な部分があってよいと思います。公式記録については、寺畑喜朔、赤祖父一知 両先生による連載「医学部百五十年史のための覚え書」を初めとして、創刊号から連綿と積み重ねられた貴重な資料があります。会報を交換しているある国立大学医学部同窓会からは「歴史をきちんと書き残して下さる先輩がおられて羨ましい」とのご評価をいただいており、公式記録の役割は十分に達成されています。

その一方で、会員諸氏の息遣いが感じられる記事を増やしたいという想いが以前からありました。平成二十一年秋から掲載を始めた「学生コーナー」はその一環で、医学科四年生（旧称 学二）に〝今想うこと〟を自由に書いてもらっており、本号の「学生コーナー」は初めて女子医学生が寄稿しています。

この「学生コーナー」と対になる企画として、本号から「十全昔話」を掲載いたします。「十全昔話」は、十全同窓会の大先輩に〝医師、医学研究者として心に残る想い出〟をお聞かせいただくものですが、〝一献傾けながら後進に話して聞かせる、肩肘張らない昔話〟をお寄せ下さいとお願いしています。会員の皆さまには、「十全昔話」を味わい深い読み物としてお楽しみいただけるものと期待しています。

（山本　健　記）